

富山県婦中町  
友坂遺跡調査報告書

1984年3月

婦中町教育委員会

## 序

近年、全国各地で様々な発掘調査が行なわれています。の中には、貴重な遺物や遺構が発見され、大きな話題となるものも少なくありません。文化財を保護し、過去の人々が築きあげた文化を継承することは、地域社会の真の發展につながるものと思います。

本書は朝日小学校と朝日保育園の建設に先立って、56・57年度の2年次にわたり実施された友坂遺跡の調査報告書であります。多くの方々に活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施及び本報書の刊行にあたり、格段のご援助をいただいた地元の方々をはじめ、関係機関の皆様に厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

婦中町教育委員会

## 例　言

1. 本書は婦中町朝日小学校及び朝日保育園建設に伴なう友坂遺跡の調査報告書である。朝日小学校建設を契機とする第1次調査及び、朝日保育園建設を契機とする第2次調査の調査期間は以下のとおりである。なお、調査面積は第1次調査が $1,400\text{m}^2$ 、第2次調査が $900\text{m}^2$ である。

第1次調査 第1期 昭和56年7月17日

第2期 昭和56年7月21日～8月12日

第2次調査 第1期 昭和57年5月25日～6月8日

第2期 昭和57年6月28日～8月5日

2. 調査は婦中町教育委員会が実施した。また、調査にあたっては富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣をうけた。

3. 調査事務局は婦中町教育委員会におき、第1次調査は社会教育係長大上正弘・同社会教育主事林幸男が、第2次調査は社会教育係長大上正弘・同社会教育主事野村慶二が調査事務を担当し、教育次長喜内豊治が総括した。調査参加者は次のとおりである。

第1次調査 富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事橋本正春・松島吉信（調査担当者）・狩野睦・池野正男・久々忠義（調査員）

第2次調査 狩野睦・松島吉信（調査担当者）・岸本雅敏・橋本正春（調査員）

4. 本書の作成にあたって、遺物整理・実測・製図などの業務は富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、上記の調査担当者が行ない、婦中町教育委員会社会教育係主事田上浩幸が参加した。

5. 発掘調査期間中及び本書を作成するにあたり、下記の方々から種々有意義な指導・助言を得た。記して深甚なる謝意を表したい。

朝日小学校、同PTA、朝日保育園、同保護者会、京田良志、小島俊彰、西村公朝、橋本 正、藤田富士夫、舟崎久雄、安川組、四柳嘉章（五十音順・敬称略）

6. 本書の編集と執筆は狩野・橋本・松島・田上が行ない、各々の責は文末に記した。

7. 遺物実測図及び写真図版の縮尺は統一されておらず、それぞれに縮尺を明記した。また、遺構の表記にあたっては以下の略称を用いた。

S A：柵、S B：建物、S D：溝、S K：土壙、S E：井戸、S X：その他

## 目 次

I 造跡の位置 .....	1
第1図 地形と周辺の遺跡 .....	1
II 調査経過 .....	2
1 第1次調査 .....	2
2 第2次調査 .....	2
3 遺跡の層位 .....	2
第2図 地形と区割図 .....	2
III 調査結果 .....	3
1 第1次調査 .....	3
2 第2次調査 .....	7
IV まとめ .....	10
第3図 友坂遺跡出土の土器の年代 .....	11
引用・参考文献 .....	12
表1 第1次調査区の須恵器観察表 .....	13
表2 第1次調査区の土師器観察表 .....	14
表3 第2次調査区の須恵器観察表 .....	14
表4 第2次調査区の土師器観察表 .....	19
図版1 第1次調査区の平面図 .....	
〃 2 溝の断面図 .....	
〃 3 建物平面図(1) .....	
〃 4       〃 (2) .....	
〃 5       〃 (3) .....	
〃 6 井戸実測図 .....	
〃 7 遺物実測図 .....	
〃 8       〃 .....	
〃 9       〃 .....	
〃 10      〃 .....	
〃 11      〃 .....	
〃 12 第2次調査区の平面図 .....	
〃 13 土層図 .....	
〃 14 建物平面図 .....	
〃 15 井戸実測図 .....	
〃 16 遺物実測図 .....	
〃 17      〃 .....	
〃 18      〃 .....	
〃 19      〃 .....	
〃 20      〃 .....	
〃 21      〃 .....	
〃 22      〃 .....	
〃 23      〃 .....	

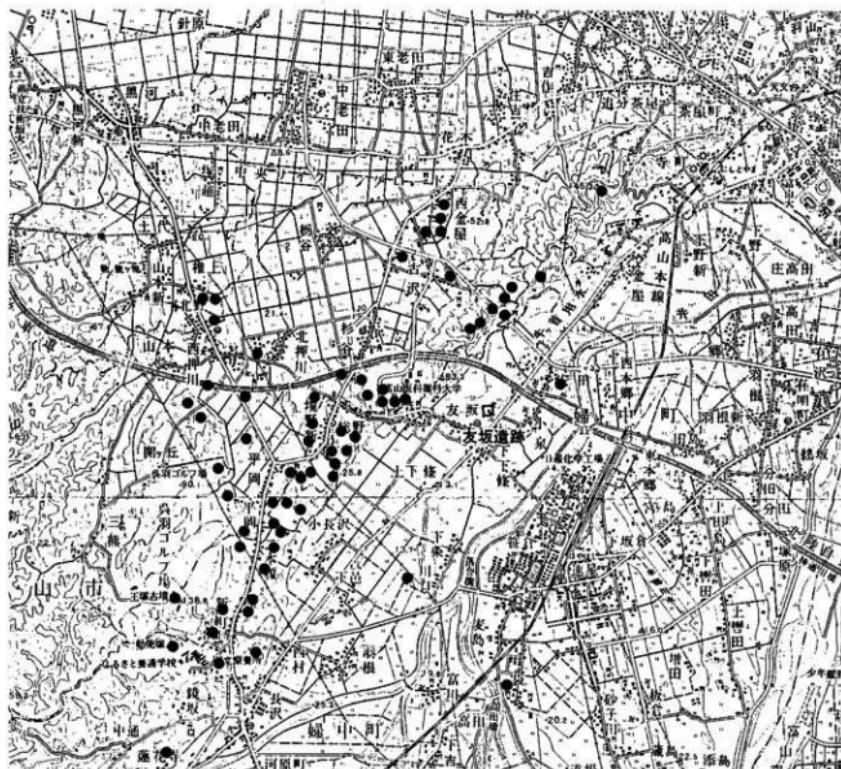
## I 遺跡の位置

友坂遺跡は、富山県婦負郡婦中町下条他に所在する(第1図)。

婦中町は、富山県のはば中央部に位置し、県都富山市に境を接する。町の東端に沿って神通川が北流し、これをへだててはるか東方には立山連峰の山々がそびえたつ。また、町の南方には牛岳をはじめ飛騨へ連なる山々が横たわり北方には富山平野を東西に二分する標高約100m余の呉羽丘陵が北東一南西方向に走る。地域は、平野部と丘陵部に分かれ、平野部は神通川と井田川によって形成された扇状地で町の東部を占め、丘陵部は呉羽丘陵から牛岳へと連なる丘陵で町の西部を占める。

友坂遺跡は、婦中町の北東部、井田川左岸の自然堤防上に立地し、標高約13mを測る。遺跡の西方約500mには、呉羽丘陵南西端の杉谷丘陵が存在する。この杉谷丘陵には、ナイフ形石器の出土、縄文時代中期の遺跡として知られる杉谷遺跡、方形周溝墓群の杉谷A遺跡、出雲地方に特有な四隅突出型方墳である杉谷4号墳、1~3番塚、5~7号墳などの古墳他、多くの遺跡が存在する。周辺の丘陵上にも、縄文時代前期中葉の平岡遺跡、王塚・勅使塚・古沢塚山などの各古墳、古墳時代中期の集落跡である境野新遺跡他、先土器時代から歴史時代にいたる各時代の遺跡が数多く存在することが知られている。これら丘陵上の遺跡の他に、友坂遺跡の立地する平野部にも、友坂遺跡の東方約500mに中世の平城跡である安田城跡が存在する。

(田上)



第1図 地形と周辺の遺跡

## II 調査経過

### 1. 第1次調査

友坂遺跡は、周辺の人々が遺物を探集して発見された遺跡である。その遺跡推定範囲内に、町立朝日小学校改築計画があるため、婦中町教育委員会と県教育委員会は、事前に遺跡の保護措置についての協議を行った。その結果、遺跡の規模・内容を把握するための試掘調査（第1期）を実施することとした。調査は、2,000m<sup>2</sup>を対象とし、調査面積は170m<sup>2</sup>である。調査の結果、古墳時代～中世にかけての遺跡であることが判った。再度事前協議を行った結果、校舎改築計画は、変更しがたいため、本調査（第2期）を実施することとし、1,400m<sup>2</sup>の記録保存調査を行った。（橋本）

### 2. 第2次調査

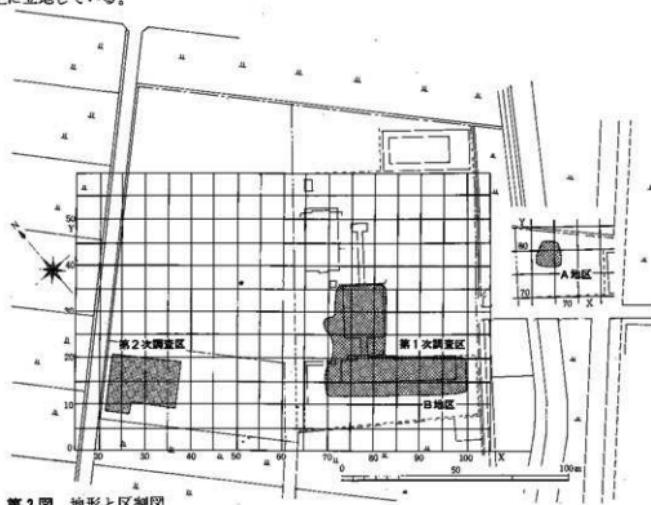
調査は町立朝日保育園建設に先立ち、第1期として前後二次にわたる試掘調査（各対象約30m×40m、約1,200m<sup>2</sup>）を、遺跡の範囲及び、内容等を確認する目的で実施した。その結果第2次試掘調査対象地とした西側調査地が、比較的遺物包含層が薄く、遺構の密集も部分的な範囲に限られることにより、恐らく友坂遺跡の西端に位置すると考えられた。以後協議の結果、当初の計画を変更して、西側調査地を園舎建設地と決定し、第2期として約700m<sup>2</sup>を対象とした記録保存調査を実施した。また同期間中に町立朝日小学校グラウンド西側擁壁部分（幅約1.5m、長さ約140m、約200m<sup>2</sup>）の記録保存調査及び、同小学校グラウンドの暗渠排水路埋設に伴う立会を実施した。（狩野）

### 3. 遺跡の層位

調査区域は朝日小学校のグラウンドとして使用されていたため、全面に造成のための盛土がなされていた。その厚さは60～80cmに及ぶ。この盛土を除去すると遺物包含層である茶褐色土が存在する。この層は第1次調査区で40～50cmと厚く、第2次調査区で10～20cmと薄くなっていた。さらに、地山への漸移層である暗黄褐色土が部分的に認められ、地山である黄褐色土に至る。大溝や井戸はこの地山層を掘りこんで造られており、さらに下位の青灰色砂質土層と青灰色粘質土層をつきぬけて、砂礫層にまで達していた。

調査区の微地形をみると、第1次調査区付近が微高地となっており、その東西に向かうにつれ段々に低くなっていることが指摘できる。この微高地は南北に細長くのびており、井田川の自然堤防と考えられる。現在の民家もこの自然堤防上に立地している。

（松島）



第2図 地形と区割図

### III 調査結果

#### I. 第1次調査

##### 遺構

今回の調査区では、北東地区と南西地区の2地点があり、前者をA地区・後者をB地区とした。

**A地区（図版1）** 遺構には、土壙と柱穴群がある。土壙SK60は、直径約1m深さ約50cmの円筒形である。柱穴は、調査区西側に多くみられ、平面形は円形で、直径20cm深さ30cm程の例が多かった。

##### B地区

遺構には、掘立柱建物9棟・櫛1列・溝11条・井戸1基・土壙9個が検出された。

**建物（図版1・3~5）** 建物は、9棟確認され、 $2 \times 1$ 間例が8棟で、 $5 \times 2$ 間例はSB03の1棟である。建物SB01・02・04は、溝SD22に平行行が平行し、SB03・05~09はSD21に平行する。SB05~08は、ほぼ同じ場所で、建物を建て替えている。柱間寸法では、1.8m 6尺~3.3m 11尺までを用い、7尺を多用する。平行柱間に、同尺寸法をくり返すものは5例あり、SB03の柱間寸法は全て6尺を使う。 $2 \times 1$ 間例で、ほぼ同規模のものは、調査区北東側のSB01・02と調査区南側のSB05~09である。建物床面積では、15m<sup>2</sup>程度が多く、SB03は、約32m<sup>2</sup>ある。建物方位は、北より東に43度~44度ふれ、ほぼ同方向の建物である。SB03は、側柱建物で、中世の同規模例は江上B遺跡〔宮田 1981〕SB112がある。なお、SB05~08は、今まで4棟推定復元しているが、1棟の建物（ $4 \times 2$ 間）を2回の建替えを行っていた可能性がある。

**櫛（図版4）** 櫛SA11は、SD22に平行して建ち、SB03、04と重複する。櫛の方位は、建物と同じである。柱間寸法は、2.1m 7尺を使い、柱4本で6.3m 21尺の長さの櫛となっている。

**溝（図版1）** 溝には、大・中・小三種のものがある。大溝は、SD21・22・24の3条で、上面幅約4m・底面幅約3m・深さ約1.5mで、断面形は「U」を呈する。中溝は、SD23・31の2条である。SD23は、上面幅約3m・底面幅約2m・深さ80cmである。断面形は、「V」で、途中に1段の平坦面がある。SD31は、深さが浅く、断面形は小溝に近い。小溝は、その他のもので、幅約20~50cm深さ5~10cmである。断面形は、「L」である。SD21・22は、「L」字形を呈し、SB04近くでは、両者で土橋を形づくる。また、両大溝は、建物をとり囲んでいる。SD23・25・27・32は、SD21・22に平行するか直交し、SD27は、SD21に平行して、SB01・02との建物を分ける。SD23は、SD22に直交するが、同時期のもので、新旧関係はみられなかった。また、他の溝も、ほぼ同時期と考えられる。SD21は、井戸SE41をこわしてつくっているため、SE41より新しい溝である。また、SD22とSB01では、溝上面で柱穴が確認出来ているため、SB01が後に建てられている。また、SD23の西に図化した柱穴も同じである。SD21からは、下駄・ヤスと多くの木製品などが出土しており、中世に属する。

**井戸（図版6）** 井戸SE41は、一辺2.5mの方形堀方のやや西側に〔木組方形横棟型〕の井側を据えている。井側は、三重になっており、一辺90cmの方形井側の内側に直径約60cmの井筒を下に据え、さらにその下に直径30cmの井筒を置く。上の井側は、長方形角材を一段組み、その外側に薄いそえ板（幅約15cm）をめぐらす。下方2段の井筒は、曲物を利用しておらず、最下位の井筒は土圧でゆがんでいた。井戸の残存高は、60cmあり、遺構検出面（溝上面）からの高さは、1.2mを測る。井戸は、上部と井側が溝SD21により埋めされている。井戸中程から砂質土層に達しており、勇水は著しい。井戸内から、白磁（94）・土師質小皿などが出土しており、中世に属する。県内の同例として、湯川市寺町遺跡〔宮本他 1982〕井戸No10があげられる。最近の井戸の研究成果〔小郡 1979〕によれば、本例は、木組井側方形横棟型で、横棟帆方はA型を用いるものにあたり、室町時代に多くみれる形となる。

**土壙（図版1）** 土壙は、9個あり、点在している。平面形は、方形と円に近い不整円形例のものが多い。中でもSK59は、方形に近いものと言える。規模では、直径2~1m、深さは50~80cmのものまである。

ここで、遺構をまとめると以下の5点となる。① $2 \times 1$ 間の建物が多く、SB03が大きなものとなる。②建物は、重複が少なく、整然と配置されている。③建物は、大溝SD21・22に囲まれる。④SD21・22で土橋部を作っている。⑤遺構類は、中世に属する。これらの点と出土遺物が、本遺跡の性格を表わすか、今後の研究を踏まえて遺跡の性格と意味づけを行ないたい。

(摘要)

### 遺物

出土した遺物は奈良・平安時代と中世に区分される。奈良・平安時代のものには須恵器・土師器・土製品があり、中世のものには珠州・越前・中国製陶磁器・土師質土器・鉄製品などがある。この他に、近世の陶磁器が若干ある。

#### A. 奈良・平安時代

##### (1) 須恵器 (図版7)

須恵器には蓋・杯・皿・壺・甕・鉢・円面鏡がある。

蓋 (1~7) 口縁部と口縁端部の形状によりA1・A2に分類する。蓋A1は口縁部がゆるく彎曲しながら端部にいたり、端部がほぼ直角に屈曲するものとする(5~7)。頂部にはヘラケズリとヨコナデが施される。口縁部の内外面にはヨコナデがなされる。蓋A2は頂部が丸く笠形を呈し、丸く折り曲げられた端部をもつものとする(3・4)。口縁部の内外面はヨコナデがなされる。また、つまみの形状は宝珠形のもの(1)と扁平なボタン状のもの(2)がある。1の内面には墨書き認められ、「文女」と判読できる。

杯 (8~11・14~20・22) 高台がつかないものを杯A、高台がつくものを杯Bとする。

杯A (8~11) の底部には丸みをもつものと平坦なものがある。すべての外底面にはヘラ切り痕が残されており、口縁部にはヨコナデがなされている。口縁部の外傾度をみると、8のような浅いものと11のように急角度で立ちあがるもののが存在する。杯B (14~20・22) は外底面にヘラキリ痕を残す個体と回転糸切り痕を残す個体に分かれれる。回転糸切り痕を残す個体は15の1点のみであり、低い高台が付着している。ヘラキリ痕を残す個体の高台は低く、外方へやや開くものと、ほぼ直立するものがある。口縁部への立ちあがり部分にヘラケズリされる個体も存在する。

皿 (12・13・21) 高台がつかないものを皿A、高台がつくものを皿Bとする。皿A (12・13) の外底面にはヘラキリ痕が残され、口縁部の内外面にはヨコナデがなされている。皿B (21) の外底面にもヘラキリ痕が残されている。低く、わずかに内傾する高台がつく。

壺 (23・28) 23は丸みをもつ底部に、外方へ強く聞く高台がつく。28の胴部外面にはカキメが走り、丸みのある肩部をもつ。いずれも短原壺と考えられる。

甕 (24・27) 肥厚した水平な口唇部をもつ。内面に同心円文、外面に平行タタキをもつ。

鉢 口径は約30cmをはかり、体部を2条の沈線が廻る。

円面鏡 (31) 口径15.0cmをはかる。外面の突帯は省略されており、成形からみる限り壺類の底部と同様なつくりとなっている。

##### (2) 土師器 (図版7)

土師器には杯・甕・壺がある。杯はすべて細片で、全体の形状を知ることができる個体は少ない。また、底部の外底面に回転糸切り痕を残す個体が存在する。甕 (30) は外反しながら立ちあがる口縁部をもつ。胴部の内外面にはハケメが、口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。

##### (3) 土鏡 (図版8)

土鏡 (51~53) は長楕円形を呈するもののみが出土している。長さは6cm前後、直径は約4cmをはかるものが多い。

##### (4) 台座 (32)

須恵質で8枚の蓮弁から構成される。蓮弁の稜線はくっきりと浮き彫りにされ、先端部は鋭く成形されている。中央部を長方形の穴が上下に貫通している。蓮内部の方が大きな穴となっており、除々に細く穿孔されている。

## B. 中世

### (1) 珠州 (図版8)

珠州には甕・壺・鉢がある。

甕 (61~64) 口縁部の形態に変化がみられる。63は肥厚した口縁部がゆるく外反しており、胴部のはりだしは弱い。61と62は肥厚した口縁部が外方へ水平に屈曲し、断面三角形を呈する。64は比較的薄い口縁部がほぼ水平に折りまげられている。

壺 (65) 外面肩部に、菱形の中に「+」が組みこまれた押印が1対確認できる。口縁部の形態は不明である。

鉢 (66・67) 内面に施される鉢目が全くないもの、間隔をおいて施されるもの、密に施されるものと変化に富む。67の口縁部内面には波状文が織る。

### (2) 越前

すべて甕の胴部破片である。胎土に含まれていた気泡が破裂し、表面が月面状を呈するものが多い。

### (3) 中国製陶磁器 (図版8)

白磁・青磁がある。白磁 (94) は碗であり、高台は外面方向から打ち欠かれている。内面は全面に施釉されているが、外面の高台付近は施釉されていない。青磁には碗と盤がある。碗 (91~93) は口縁部がゆるく外反し、内外面ともに無文となるものが多い。また、釉の発色は青緑色となっている。盤 (95) はゆるく立ちあがった口縁部が外方へ水平に屈曲し、さらに垂直に立ちあがって終る。内面には縱方向の沈線が走り、表面には内外面ともに大きな貫入が走る。断面に漆が付着しており、漆を接着材として補修されていることがわかる。

### (4) 土師質土器 (図版8)

土師質土器はすべて小皿である。外底面に糸切り痕をもつもの (71) とゆるやかな丸底となりナデが観察されるもの (72~84) がある。71は口径8.0cm、高さ2.1cmをはかる。底部から口縁部へは直線的に立ちあがり、内外面ともにヨコナデが観察される。72~82の口縁部はわずかに内脣しながら立ちあがり、端部は先細りとなっている。これに対して、83と84は内外面にヨコナデが施され、口縁部はゆるやかに外反しながら立ちあがる特徴をもつ。

## C. その他

### (1) 鉄製品 (図版8)

ヤスが1点出土している (96)。全長は24.7cm、最大幅8.5cmをはかる。先端部のカエシは内側へ作出されており、基部は鍵針状に折り曲げられている。

### (2) 瓦質土器

瓦質土器には火鉢がある。丸火鉢で口径は52.0cmをはかる。口唇部は水平に内側へ折り曲げられており、体部はゆるやかに背屈する。口縁部外面上には押型による「巴」が1対押されている。

### (3) 木製品 (図版9~11)

下駄 (1001~1003) いわゆる露卯下駄 (1001~1003) と連齒下駄 (1002) がある。1001はS D 21から出土している。長さ21.8cm、幅9.0cm、厚さ3.8cmをはかり、台部は断面舟底形に削りだされている。緒孔は焼火箸であけられ、台裏のみ金属工具で再加工が施されている。鼻緒孔は垂直に穿孔されているのに対して、後緒孔は左右両端から中心へ向かって斜めに穿孔されており、台裏で連結している。枘穴は金属工具ではなく正方形に前後1対づつあけられている。台裏には差歎用の溝が切りだされている。前歎は高さ13.0cm、最大幅13.0cmの台形状を呈する。1003は台部の前半分が現存しており、推定の長さ20.0cm、幅9.5cm、厚さ4.0cmをはかる。後緒孔はやはり焼火箸であけられており、左右両端から中心へ向かって斜めに穿孔されている。前歎の枘穴は中央部に一ヶ所のみ穿孔されており、一辺が約2.5cmの正方形を呈する。台裏には差歎のための溝がきらわれている。幅2.0cm、深さ2.5cmをはかる。1002の連齒下駄は長さ

20.0cm、幅9.5cmをはかる。厚さは台部で1.7cm、歯部で4.0cmをはかる。緒孔は焼火箸で穿孔されており、直径が約1.5cmの大きさとなっている。前歯と較べると後歯はかなりすりへっている。また、左側半分もかなりすりへっており、この下歯が左足専用に使われていたことがわかる。事実、台部表側の鼻緒付近に観察される足指による摩滅の状況も、左足専用に使用されたことを裏づけている。

**舟形** (1008) 推定幅は21.0cmをはかり、長さは不明である。ふ厚い素材から削りだしにより成形されている。厚さは側辺で約3.0cm、底部で約1.0cmをはかる。側部には1対の目クギの跡が残っており、外方へ斜めにつきぬけている。

**漆器** (1010, 1011, 1061) 梱が3個体確認でき、いずれもSD21から出土している。1011は内外面ともに黒漆塗りであり、見込みに赤漆で木葉文が描かれている。1010と1061は全面に黒漆が塗られ、体部外面に赤漆で草花文が描かれている。

**紡錘車** (1007) 直径が約5.5cm、厚さ0.6cmの円盤状を呈する。ほぼ中央に直径0.6cmの穿孔がなされている。板材が素材となっているが周辺部は荒く削られ、角が落とされている。

**ヘラ** (1004, 1014, 1033, 1034) ヘラは形状によりA・B類に分類できる。A類は1004の1点のみで、薄い板材の片側に抉りを入れ肩部が作りだされている。長さは14.5cm、最大幅は5.0cm、厚さは1.0cmをはかる。B類は(1014, 1033, 1034)は板材の一端をクサビ状に削りだしているものである。削りだしは片面からのみ行なわれている。1014は幅広の素材が用いられており、上部中央に小さな穿孔がなされている。1033は1辺が1.7cmの方形の角材が素材として用いられている。他のものに較べて先端部の削りだしは急角度に行なわれている。1034は長さが12.5cm、幅が3.8cm、厚さが1.2cmをはかる。先端部は浅い角度で削りだされている。

**鑓** (1009, 1017) 1009は直径2.2cmの芯もち材が素材として使われている。全面が細かく削りだされており、先端部は折れているが、扁平なボタン状のつまみがつくと考えられる。1017はSD21から出土している。1辺が約1.5cmの方形の小さな角材が使用されており、先端部は円柱状に削りだされている。中央よりやや先端の位置に、横方向に木クギが入りこんでいる。木クギの直径は0.6cmをはかる。

**桶** (1012, 1013) いずれも底板である。1012は直径25.5cm、厚さ0.7cmをはかる。外面は部分的に黒くこげている。外周端部には間隔をおいて「コ」の字状の樹皮が埋めこまれておらず、側板を固定する役割を果たしていたと考える。1013は直径23.0cm、厚さ0.4cmをはかる。中央部には炭化物が付着している。外周端部は部分的に斜めに削りだされており、側板との接触角度が調整されている。

**箸** (1044~1048) 1044の1点のみが完形品で他は折損品である。1044は長さ22.5cm、最大径0.6cmをはかる。全面は荒く削られており、先端部へ向かうにつれ先細りに成形されている。

**井戸枠** (1028~1031) SE41の上部構造は木組の方形を呈していた。4本の横樋が接合して方形の枠となり、その周辺を薄い板材が囲っている。横樋は長さがそれぞれ約90cmをはかり、約8cm×5cmの長方形角材が素材として用いられている。縦板は幅が20~30cmの荒削りの板材が用いられている。上部は折損しており、全長は不明である。

**その他** 1005は長方形の板材の一辺が鋭く削りだされた木製品である。対辺は丸く背がつけられており、断面は細長い二等辺三角形を呈する。面取りは片側3面に仕上げられ、長軸の両端は丸く成形されている。ほぼ中央に1.5×1.2cmの長方形の穿孔が金属工具により穿かれており、長さ14.0cm、幅4.2cm、最大幅1.6cmをはかる。1006は直径約6.0cm、厚さ1.0cmの円盤形を呈する木製品である。表裏とともに同様部は0.5cmの幅で削りとられている。板材(1020~1026)のなかで曲物の側板と考えられるものがある(1024~1026)。いずれも幅2.5~3cm、厚さ0.15~0.2cmをはかる。角材(1019, 1027, 1032)には板材を方形に整えたものと芯もち材がある。

(松島)

## 2. 第2次調査

### 遺構

遺構は柱穴・井戸・土壤・溝等があり、奈良・平安時代の遺物包含層を掘込んでいる。時代的には中世に属する。  
建物（図版14）SB111—復原できた掘立柱建物は、柱間2間×1間の南北棟の建物1棟である。桁行・梁行は4.5m (1.5m+3.0m) ×3.3mで、柱間に定数尺（1尺=約30cm）を用いたものと思われ、15尺（5尺+10尺）×11尺となる。建物の方位は北より30度西へ主軸がふれる。なお桁行の南側方向に建物が延びる可能性がある。

井戸（図版15）SE141-SB111の西側に隣接している石組井戸で、上端の内径は約1.4mを測る。井筒は変形し椭円形を呈しており、径0.4~0.5m×深さ0.48mの底を抜いた桶を勇水層の砂礫層に掘込んで据えている。掘方は径1.8~2.0mとやや椭円形状である。石組は約0.1~0.4mの川原石を桶の周辺部より埋込み、桶を固定し、桶の上端部より積みあげている。この石組には、石臼及び五輪塔（火輪・地輪）が転用されていた。遺物は前記の桶（1104）・石臼（553・554・556）・五輪塔（555・557・558）以外に珠州、土師質小皿（416）が出土した。SB111との関係は、SB111よりほとんど遺物の出土がなく判断できないが、位置関係よりSB111に併設されたものと思われる。

土壤 SK152—長さ4.9m×幅3.3m×深さ0.4~0.55mの長方形をした土壤で、床面は2枚の貼床状の面を検出したが、柱穴は確認できなかった。なお、土層の堆積状況（図版13）から、短期間に人为的に埋められたと思われる。遺物は珠州、土師質小皿（418）が出土した。SK161—長さ5.0m×幅3.0m×深さ0.5mで、平面形は長方形状と思われるが、南側壁がSD129により切られている。覆土内より火葬人骨の細片が出土しており、埋葬施設的な土壤かもしれない。他の遺物には珠州（453）、土師質小皿が出土した。

溝 大溝SD129—幅3.6m×深さ0.6~0.8mを測る東流する溝で、上部は1条であるが底で2条に分かれている。溝の北側において柱穴は確認できず、居住地を区画する溝と思われる。遺物は珠州・土師質小皿・木製品（1101~1103・1105）が出土した。小溝幅0.2m~2.0m×深さ0.1~0.7mと比較的浅い。SD124・125は大溝SD129と平行に東流し、SD126・127はSB111の東側を平行に北流し、発掘区中央部で大溝129と直交する。遺物は珠州（SD121, 451）、土師質小皿（SD121, 420, SD126, 404）が出土した。なおSD126より火葬人骨細片が若干出土した。（狩野）

### 遺物

出土した遺物は奈良・平安時代と中世のものに大きく分けることができる。奈良・平安時代のものには須恵器・土器・土製品などがある。中世のものには珠州・越前・中国製陶磁器・土師質土器・石製品などがある。

#### A. 奈良・平安時代

##### (1) 須恵器（図版16~19）

須恵器には蓋・杯・皿・壺・横瓶・甕・鉢・高杯・壺がある。これらのうち、供膳用の蓋・杯が大部分を占める。

蓋 形態によりA・Bに分類する。蓋Aは頂部が丸く笠形を呈し口縁部がゆるく彎曲しながら端部にいたるものとする。蓋Bは壺蓋であり、平らな頂部とほぼ直角におれ曲る縁部からなる。蓋Aはさらに端部がほぼ直角に屈曲し鋭い断面三角形を呈する蓋A<sub>1</sub>、端部が丸みをもって内側へおれ曲る蓋A<sub>2</sub>、端部がほとんど屈曲せずに終る蓋A<sub>3</sub>に細分する。

蓋A<sub>1</sub>（101~108・111・115~120・124・128・130~139）の頂部はヘラケズリされるものがほとんどで、個体数は少ないがヘラケズリの後にナデによる仕上げがなされているものもある。内面はヨコナデがなされている。つまみは宝珠形のものと扁平なボタン状のものがある。蓋A<sub>2</sub>（109・110・112・113・121~123）の頂部はヨコナデの例が最も多く、ヘラケズリがなされる個体もある。内面はヨコナデがなされている。蓋A<sub>3</sub>（114・126）の口径は114で18.6cm, 126で17.0cmをはかりて大型となっている。頂部はヨコナデがなされている。

蓋B（127）の口径は12.0cmをはかる。内外面ともにヨコナデがなされている。つまみの痕跡を明瞭に残しているが、その形態は不明である。端部はわずかに外反して終っている。

**杯** 高台がつかないものを杯A、高台がつくものを杯Bとする。杯Aには底部の形状が丸味をもつものと平坦なものがある。また、口縁部の外傾度や法量差に変化が認められる。ほとんどの個体の外底面にヘラケズリの痕跡を残し、わずかながら、ヘラキリの後ナデによる調整が観察される個体もある。杯Bは外底面にヘラキリ痕を残す個体と回転糸切り痕を残す個体に分けることができる。ヘラキリ痕を残す個体の高台は低く外方へやや広がるものと、ほぼ直立してふんばるものがある。また、高台を付着する際のナデを外底面の全面に施している例も認められる。口縁部の外傾度や法量差にも変化が認められる。回転糸切り痕を残す個体（200・202）は底部から口縁部へは直線的に立ちあがる特徴をもつ。高台は低くほぼ直立するものと断面三角形のものがある。196は底部からの立ちあがりが途中で屈曲し、直立した口縁部となる。外底面にヘラキリ痕を残し、外面はヨコナデがなされている。

**皿** (195) 口径は13.0cmをはかる。外底面にヘラキリ痕を残し、ほぼ直立する高台をもつ。口縁部はほぼ水平方向に直線的に立ちあがり、口縁端部はわずかに肥厚して終る。外面ともにヨコナデがなされる。

**壺** (205～222) 形態によりA～Fに分類する。壺A（205・207・208）はいわゆる長頸瓶である。すべて口縁部の破片であり、口径は7.0～12.0cmをはかる。壺B（212・213）は「N」状に屈曲した口縁端部をもち、口径は17.0～20.0cmをはかる。瓶の口縁部である。215は三耳瓶であり、肩部に一条の沈線をもつ。壺Cは（217・219）は短頸壺である。肩部はゆるく丸味をもち、体部の最大径は約24cmをはかる。口縁部はほぼ直立するように立ちあがる。217・219は肩部に細い2条の沈線を有する。壺D（214）は丸味をもつ体部をもち、肩部に一体の凸帯が廻る。体部の最大径は約26cmをはかる。壺E（220・221）には2種類ある。220は徳利形の壺であり、肩部に浅い沈線をもつ。221は小型壺で、体部径は約11cmをはかる。

**横瓶** (228) 体部の最大径は約20cmをはかる。外面に平行タタキ、内円に同心円文をもつ。

**甕** (209・210・223～225・227) 形状によりA～Cに分類する。甕A（209）は肥厚した口縁部が外方へ屈曲し、やや垂れ気味となる。甕B（209・223・225）はほぼ水平な口縁端部をもつ。内面に同心円タタキ、外面に平行タタキをもつ。甕C（227）は体部に把手をもつものである。内面に同心円文、外面に平行タタキをもつ。

その他に壠（226）と高杯（229）がある。壠は体部に小さな把手がつく。

### (2) 土師器 (図版20・21)

土師器には杯・甕・壠がある。

**杯** (323・409) 323は外方へやや開く高台をもつ。外底面にはナデによる調整がなされている。409は無高台の杯である。外底面には回転糸切り痕が残されている。外面ともにヨコナデが観察される。

**甕** (301～315) 口縁端部の形態によりA・Bに分類する。甕Aは外反しながら立ちあがった口縁部がそのまま終るものである。甕Bは甕Aの口縁端部がほぼ直立するように屈曲して終るものである。甕A（301～307・310・312・315・321）の口縁部外面はヨコナデがなされ、口縁部内面はカキメ調整されることが多い。胴部上半は外面ともにカキメが施されるものが多いが、302や315ではハケメも施されている。胴部下半は内面に同心円文、外面に平行タタキがなされており、部分的にヘラケズリがなされるものもある。甕B（308・309・311・313・314）も調整からみる限り、甕Aと同様の調整がなされている。口縁端部の形状は断面三角形を呈するものと、厚味があり丸く終るもののが存在する。

**壠** (316～318) 口縁部がゆるく外反して終る特徴をもつ。胴部上半の外面はカキメ調整がなされ、部分的にさらにハケメが施される。胴部下半はヘラケズリがなされている。

### (3) 土錐 (図版21)

形状からA・Bに分類できる。土錐A（351～355）は細長い管状のものである。長さは4～7cmの範囲に分布する。土錐B（356～368）はずんぐりした長楕円形を呈するものである。長さは5～8cmの範囲におさまる。

### (1) 珠州(図版21)

珠州には甕・壺・鉢がある。

甕(451) 肥厚した口縁部は断面三角形を呈するように外方へ折り曲げられる。口径は約70cmをはかる。鉢(452~455)、454と455の内面に卸し目は施されていない。他の個体では数条の卸し目が間隔をおいて施されるものや、内面のほぼ全面に施されるものが存在する。また、口縁部内面に波状文が施文されるものもわずかながら存在する。

### (2) 越前

越前は大半が甕の胴部破片である。口縁部の破片はわずかであるが、口唇部が屈曲して「N」字状になるものと、ほぼ直立して水平な口唇部を形成するものがある。

### (3) 中国製陶器(図版21)

白磁・青磁がある。白磁にはいわゆる「口はけ」の皿がある(502)。青磁は大半が碗の破片である。蓮弁等の文様が観察される個体はない。釉の発色は青緑色のものと淡い黄褐色のものがあり、前者は龍泉窯系、後者は同安窯系と考える。

### (4) 土師質土器(図版20・21)

土師質土器には土釜・小皿・台付小皿がある。土釜(319)は口径24.0cmをはかる。胴部上半を凸帯が廻る。内外面ともにハケメが施されている。小皿には外底面に回転糸切り痕を残すものがわずかながら存在する(401・402)。いずれも口縁部は厚く丸味をもって終り、立ちあがりは垂直に近い角度をもつ。その他(403~412)は口縁部が浅い角度で立ちあがり、口縁端部に向かうにつれて薄く成形されている。台付小皿(413・412)の外底面には回転糸切り痕を残す。

### (5) 石製品(図版22)

石臼(553・554・556)と五輪塔(555・557・558)がある。556は上臼であり直径は約30cmをはかる。553と554は下臼であり、いずれも直径は約30cmをはかる。555の火輪は端部が打ち欠かれて丸く成形されている。

## C. その他

### (1) 鉄滓・羽口

製鉄に関連するものとして鉄滓と羽口(559・560)がある。鉄滓の中には碗形座と考えられる断面カマボコ形のものが存在する。一部が欠損しているが、14×11cmの角のとれた長方形を呈する。羽口はすべて破片であり全体の形状を知ることができるものはない。559は最大径が8.5cmをはかる。表面は黒褐色もしくは赤褐色に変色しているものが多く、海綿状に溶けている部分もある。これらはいずれも包含層からの出土であり、所属年代は決めがたい。

### (2) 瓦

平瓦の破片がSD127から1点出土している(566)。厚さは2.2cmをはかり、凹面に布目痕が観察される。

### (3) 瓦質土器

瓦質土器では火鉢がある(501)。丸火鉢で口径は約40cmをはかる。口唇部は水平に内側へ折り曲げられており、口縁部外面には2条の凸帯が廻る。その間に押型による文様が連続して押されている。  
(松島)

### (4) 木製品(図版23)

漆椀、脚、曲物、井筒等の出土がある。漆椀は2点出土し、径約12cm×高さ約6cm、内面朱漆塗、外側黒漆塗で朱漆の模様があるもの(1101)と径約13cm×高さ約9.5cm、内外面共に黒漆塗で外側に朱漆の模様がわずかに残っているもの(1102)とがある。脚(1105)は高さ約5cm×長さ約46cmの逆凹字型のもので上部に4ヶ所孔があり、そのうち1ヶ所には樹皮が残存している。上部中央には、深さ約2.5cm×幅0.8cmの抉りがあり、おそらく十字型に組み合せ、上部に板を樹皮で固定した「勝」のようなものの脚であったと考えられる。曲物(1103)は幅約5cm×長さ約22cmの板材19枚を竹のタガで組み合せたもので、上部径約27cm、下部径約23cmを測る。  
(田上)

## IV まとめ

### 出土遺物の年代について

富山県における奈良・平安時代の土器編年は主に型式学的研究を基礎として進められてきた〔舟崎1974・藤田1974など〕。また近年、無地の発掘調査も行なわれ、平城宮の土器編年〔小笠原他1976〕との対比もなされている〔上野・池野1980・伊藤1981など〕。一方、吉岡康暢氏は資料がそろいつつある加賀地方を中心として、独自の研究成果を発表している〔吉岡1983〕。この研究は編年を組みたてにあたり、①土器群の器形・技法及び量的な変化、②杯だけではなく甕壺類ものの観察、③杯類の測定法の客觀化の3点を重視している。このように資料を多角的に分析し、編年づけていく姿勢には高い評価が与えられる。友坂遺跡では年代幅をもつ遺物が混在して出土しており、前述の研究成果を踏まえて遺物の所属年代を考えてみる。

須恵器の杯蓋の技術的特徴では頂部のヘラケズリと端部の成形が指摘できる。ヘラケズリについては大半の個体に認められ、一部の個体にはさらにナデも観察される。端部の成形はほぼ直角に屈曲し断面三角形を呈するA1類と丸みをもって内側へ折り曲げられるA2類に分類できる。県内の他遺跡を概観すると、8世紀前半に位置づけられている平桜岡山3号窯〔伊藤1981〕や流田No16遺跡2号窯〔上野・池野1980〕では頂部のヘラケズリと端部成形A1類の特徴をもつ。また、8世紀後半に位置づけられている高沢島II遺跡〔橋本他1978〕や砺波市福山窯〔砺波市史編纂委員会1962・舟崎1974〕では頂部のヘラケズリと端部成形A2類の特徴をもつ。一方、端部がほとんど屈曲せずに終るA3類はA1類やA2類と比べて型式学的に後出的な要素といえる。これら杯蓋に対応する杯をみると、8世紀前半には杯Aの外底面にヘラキリ痕を残し、口縁部が垂直に近い角度で立ちあがるものが属し、杯Bでは、外底面にヘラキリ痕を残し、低く外方へやや開く高台をもつものが属する。8世紀後半には、杯Aの口縁部の外傾度が浅いものが属し、杯Bでは、低くほぼ垂直に立つ高台をもつものが属する。また、杯Bの外底面に回転糸切り痕を残す一群は杯蓋A3類とともに10世紀前半にその所属年代を求める。はたして、入善町じょうべのま遺跡ではほぼ9世紀代に属する資料が出土しており、その最終段階に回転糸切り底に高台を付す一群が出現している〔橋本・岸本1975〕。また、立山町古窯跡群では9世紀後半～10世紀代に属する法光寺谷2・3号窯にこの特徴が認められる〔藤田1974〕。さらに10世紀後半に位置づけされている大沢野町野沢遺跡〔鈴木他1982〕や朝日町道下遺跡〔橋本・松島1984〕では供膳形態の大部分を土師器が占めており、本遺跡より後出的な様相となっている。

以上、須恵器では8世紀代と10世紀前半に所属年代を求めることができたが、これらと対応する土師器もその所属年代は矛盾しない。甕の技法的な特徴では胴部の調整と口縁端部の成形が指摘できる。胴部上半にカキメ、下半にタタキメとヘラケズリを施す特徴は奈良時代以降に認められる〔岸本1982〕。口縁端部が外反しながらそのまま終るもののは8世紀前半、外方へ開いた口縁部がほぼ垂直に屈曲し立ちあがるものは8世紀後半に位置づけできる。10世紀前半に含まれる土師器としては高台付の杯や底部に回転糸切り痕を残す杯がある。口縁部が肥厚して終る甕もこの時期に属すると考えられる〔藤田他1983〕。

中世の編年研究は在地陶器である珠州の編年作業〔吉岡1977・1981〕が基礎となって進められてきた。また、近年輪入陶磁器による年代決定も可能となってきた〔岸本・山本1982、高慶他1983など〕。

友坂遺跡で出土した珠州はⅠ期からⅥ期まで及ぶ。Ⅰ期に属する資料は甕では口縁がほぼ水平に屈曲する個体であり、鉢では内面に卸し目をもたず、口唇部の継が外面に形成される小型的一群である。また、甕の肥厚した口縁部が外方へ折り曲げられ断面三角形を呈する個体や、鉢の卸し目が間隔をおいて施され、口唇部がほぼ水平となる個体はⅢ～Ⅳ期に所属する。Ⅴ～Ⅵ期の資料としては鉢の口縁部内面にクシガキ波状文が施される個体がある。

中国製陶磁器は大半が碗の破片であり、1例のみ盤の口縁部が認められる。青磁碗の体部外面は無文であり、口縁

部は端返りとなっている。青磁盤を含めてこれらの青磁は龍泉窯系と考えられ、その所属年代は14世紀後半から15世紀前半に求めることができる（上田1982）。また、白磁にはいわゆる「口はげ」の皿があり、青磁の年代よりも若干古く位置づけられる（森田1982）。

以上のように、珠州は12～15世紀に、輸入陶磁器は14～15世紀に所属年代を求めることができたが、これらに対応して土師質小皿も時代区分することができる。古付小皿は全て外底面に回転糸切り痕を残し、また、比較的厚手の作りで口縁部がほぼ垂直に立ちあがる個体も回転糸切り痕を残す。これらの一類はI～II期の珠州と共伴する例が多く、中世初頭に位置づけされる。14～16世紀に属する土師質小皿の大半は手づくねによって成形され、口縁部は浅い角度で立ちあがる特徴をもつ。

友坂遺跡出土の遺物はおおむね8世紀代、10世紀前半、12～16世紀の3期に分けることができた。しかし、それぞれの時期において、一般集落遺跡で認められる土器組成は示しておらず、偏よりがみられる。また、須恵質の古座、瓦、鐵津、五輪塔、多くの木製品など遺跡の性格を暗示する資料がある。これらの今後に残された研究課題が多い。

（松島）

年代	友坂遺跡出土の主な土器	県内 の 主な 遺跡	
		県内 の 主な 遺跡	県内 の主な 遺跡
700			
800		福山 益谷	中山南 高沢島II
900		亀谷 法光寺谷 1号 万年寺谷 法光寺谷 2・3号	佐伯 じょうべのま
1000			
1100			
1200			神田 じょうべのま
1300			日の宮*
1400			弓ノ庄*
1500			江上B*

第3図 友坂遺跡出土の土器の年代

\*江上B遺跡は12～15世紀、弓ノ庄・日の宮遺跡は12～16世紀の遺物を含む。

## 引用・参考文献

- ア 稲倉氏遺跡調査研究所編 1980 「特別史跡 一乘谷朝倉氏遺跡」 福井県教育委員会 稲倉氏遺跡調査研究所
- 稻倉氏遺跡資料館編 1982 「特別史跡 一乘谷朝倉氏遺跡III」 福井県教育委員会 福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 稻倉氏遺跡資料館編 1983 「特別史跡 一乘谷朝倉氏遺跡IV」 福井県立朝倉氏遺跡資料館
- イ 伊藤隆三 1981 「富山県小矢部市平岡山3号墓跡」 小矢部市教育委員会
- 伊吹 善・福原芳秀・新谷武夫・福井千万・松下正司・鶴見光雄 1973 「草戸千軒町遺跡第一第9・10次発掘調査概要」 広島県教育委員会
- ウ 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」 「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易陶磁研究会
- 上野 勝・池野正男 1980 「富山県小杉町・大門町小杉坂通事業団地内遺跡群第2大緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- オ 小笠原好彦・西 弘治 1976 「『考察』2土器」 「平城宮発掘調査報告書」 奈良國文化財研究所
- 小部 隆・金井竜喜・藤巻光雄 1973 「草戸千軒町遺跡1972年度発掘調査概報」 広島県教育委員会
- 小部 隆 1979 「京戸千軒の井戸」 「考古学研究第26卷第3号」 考古学研究会
- 牛 岸本雅敏 1982 「吉城寺遺跡の開拓」 福光町教育委員会
- 牛 岸本雅敏・山本正敏 1982 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)」 入善町教育委員会
- 牛 岸本雅敏 1982 「『北陸自動車道跡調査報告書』上市町土器・石器編」 上市町教育委員会
- コ 高慶 孝・松島吉信・酒井重洋・山本正敏・富田進一 1983 「富山県上市町弓庄城跡第3次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 小崎芳幸 1981 「寺家 1980年度調査概報」 石川県立郷土文化センター
- 小村 茂・橋本達夫 1974 「小松市吉守のまの追跡」 石川県教育委員会
- サ 畠山 隆・久々志義・神保孝造 1979 「富山県大野町野沢遺跡発掘調査報告書」 大野町教育委員会
- 酒井重洋・神保孝造・橋本正春・高島 幸・高慶 孝 1981 「富山県上市町弓庄城跡緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 酒井重洋・橋本正春・高慶 孝 1982 「富山県上市町弓庄城跡第2次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 桜井隆夫 1983 「5 山田遺跡」 「黒部市道糞化財分布調査概要1」 黒部市教育委員会
- シ 畠原芳秀・木田原重人・小田原昭嗣・福島政文・植上 誠 1981 「草戸千軒町遺跡第一第30大堀町調査概要」 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- ス 鈴木忠司他 1982 「富山県大野町野沢遺跡発掘調査報告書(八地点)」 大野町教育委員会
- ト 斎波市史編纂委員会編 1967 「斎波市椎山〈徳万代城〉須恵器発掘報告」
- ナ 中島俊一・堀 幸夫 1975 「安養寺遺跡群(安養寺・柴木・郡入道地区)発掘調査報告」 石川県教育委員会
- ハ 橋本 正・岸本雅敏 1975 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」 入善町教育委員会
- 橋本 正・久々志義・神保孝造・岡上進一 1978 「5高沢島II遺跡・6高沢島III遺跡」 「富山県砺波市柏原野遺跡群子備調査概要」 砺波市教育委員会
- 橋本 正・上野 実・山本正敏・池野正男・松本幸治 1979 「富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 橋本正春 1982 「II 神田遺跡」 「北陸自動車道跡調査報告書」上市町土器・石器編」 上市町教育委員会
- 橋本正春・松島吉信 1982 「北陸自動車道跡調査報告書」明日町細一「道下遺跡」 富山県教育委員会
- フ 藤田富士夫 1971 「第四章 遺物」 「小杉町中山南遺跡調査報告書」 富山県教育委員会
- 藤田富士夫 1974 「富山県立古墳群」 「考古学ジャーナル第97号」
- 藤田富士夫・高橋修宏・吉川知明 1983 「古沢A遺跡発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 舟嶋久雄 1974 「第二章 土器の編年」 「富山県埋蔵文化財調査報告書」 富山県教育委員会
- チ 松下正司・福井千万・鹿見智太郎・篠原芳秀・高島光雄・志田原重人 1975 「草戸千軒町遺跡第一第15~17次発掘調査概要」 広島県教育委員会  
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 松下正司・福井千万・篠原芳秀・新谷武夫・加藤亮子 1976 「草戸千軒町遺跡第一第11~14次発掘調査概要」 広島県教育委員会
- 松下正司・志田原重人・篠原芳秀・小田原昭嗣・山県 元・糸井義雄・植上 誠 1978 「草戸千軒町遺跡第一第24~26次発掘調査概要」 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 松下正司・山県 元・鹿見智太郎・篠原芳秀・志田原重人・小田原昭嗣・植上 誠 1979 「草戸千軒町遺跡第一第27次発掘調査概要」 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- ミ 宮田進一 1981 「7 江上B遺跡」 「北陸自動車道跡調査報告書」上市町遺跡編一 上市町教育委員会
- 宮田進一 1982 「W 江上B遺跡」 「北陸自動車道跡調査報告書」上市町土器・石器編一 上市町教育委員会
- 宮本幸雄 1982 「寺町遺跡」 「安田・寺町遺跡発掘調査報告書」 滋賀県教育委員会
- モ 森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」 「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易陶磁研究会
- 吉岡康暢 1977 「加賀・芦州」 「世界陶磁全集3 日本中世」
- 吉岡康暢 1981 「珠州」 「日本やきもの集成 北陸」
- 吉岡康暢 1983A 「海祇」 「東大寺御横江庄遺跡」 松任市教育委員会 石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1983B 「奈良・平安時代の土器編年」 「東大寺御横江庄遺跡」 松任市教育委員会 石川考古学研究会
- 四柳嘉章・辻本 雄 1980 「西川島・I」 大水町教育委員会

表1 第1次調査区の須恵器観察表

番号	器種	出土区	法 量				成 形 調 整						備 考
			口 径	胴部径	脚底径	器 高	外 面			内 面			
							口縁部	体 部	頂 部	脚・底部	口縁部	体 部	頂 部
1	杯 壺	去塗							ハラケズリ			ヨコナデ	
2	杯 壺	X75-10 Y80-85 2号							ナゲ			ヨコナデ	
3	杯 壺	S D22 X75-25, Y80-25 2号	12.0				ヨコナデ			ヨコナデ			
4	杯 壺	X70-85 Y80-85 2号	14.0				ヨコナデ			ヨコナデ			
5	杯 壺	X80-85 Y80-85 2号	7.0				ヨコナデ			ヨコナデ			
6	杯 壺	X75-85, Y85-90 4号	16.0				ヨコナデ		ハラキリ ヨコナデ			ヨコナデ	ナゲ
7	杯 壺	S D22 X80-85, Y15-20 4号	17.5				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		ナゲ	
8	杯 A	No18 3-4号	11.0		7.3		ヨコナデ	ヨコナデ	ハラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
9	杯 A	S D22 X80-85, Y18-20 4号	12.7		15.0	3.6	ヨコナデ	ヨコナデ	ハラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
10	杯 A	S D22 X80-85, Y12-13 4号	12.8		9.6	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	ハラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
11	杯 A	S D22 X80-85, Y80-90 4号	12.5		8.8	3.0			ハラキリ			ヨコナデ	
12	皿	S D22 X80-85, Y20-25 4号	16.0		11.4	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	ハラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
13	皿	S D22 X80-85, Y15-20 4号	15.6		11.6	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ	ヨコナデ		
14	杯 B	去塗			5.0								
15	杯 B	S D22 X80-85, Y80-25 4号			6.0		ヨコナデ		ハラキリ ヨコナデ			ヨコナデ	
16	杯 B	X80-85 Y80-85 2号			5.8		ヨコナデ		ハラキリ ヨコナデ		ヨコナデ	ヨコナデ	
17	杯 B	S D22 X80-85, Y80-25 4号			8.6				ハラキリ ヨコナデ			ヨコナデ	
18	杯 B	X80-85 Y80-85 2号			7.5				ハラキリ ヨコナデ			ヨコナデ	
19	杯 B	井戸 岩内			7.6		ヨコナデ		ハラキリ ヨコナデ		ヨコナデ	ヨコナデ	
20	杯 B	S D22 X80-85, Y85-90 4号			7.1		ヨコナデ		ハラキリ ヨコナデ		ヨコナデ	ヨコナデ	
21	皿	S D22 X80-85, Y18-20 4号		12.4	8.0	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	ハラキリ ハラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
22	杯 B	S D22 X70-77, Y85-90 4号			8.2		ヨコナデ		ハラキリ ヨコナデ		ヨコナデ	ヨコナデ	
23	壺	S D22 X80-85, Y80-95 4号			11.0		ヨコナデ		ヨコナデ		ヨコナデ	ナゲ	
24	壺	去塗		36.0			ヨコナデ	平行テクス		ヨコナデ	同心円文		
25	壺	S D22 X77-80, Y80-90 4号			16.0		平行テクス				同心円文 ナゲ		
26	壺	S D22 X70-80, Y80-90 4号			12.0		平行テクス カギメタ		ハラキリ		同心円文		
27	壺	S D24 X70-80, Y80 4号		22.0			ヨコナデ	平行テクス		ヨコナデ	同心円文		
28	壺	S D24 X70-80, Y80 4号			23.4			平行テクス カギメタ		ヨコナデ	同心円文 ナゲ	ハラキリ	
29	鉢	S D22 テクス		29.4			ヨコナデ	ハラケズリ		ヨコナデ	ヨコナデ		
31	円面鏡			15.0									

表2 第1次調査区の土器器観察表

番号	器種	出土区	法量				成形・調整						備考	
			口径	頸部径	脚底径	高さ	外面			内面				
							口縁部	肩上部	肩下部	脚・底部	口縁部	肩上部	肩下部	
30	甕	S.D.5 ワタエ	14.0				ヨコナギ	ハケメ			ヨコナギ	ハケメ		

表3 第2次調査区の須恵器観察表

番号	器種	出土区	法量				成形・調整						備考	
			口径	頸部径	脚底径	高さ	外面			内面				
							口縁部	体部	頂部	脚・底部	口縁部	体部	頂部	
101	杯	甕	12.0				ヨコナギ		ハラケズリ	ヨコナギ		ヨコナギ		体部表面に擦れ跡がある
102	杯	甕	13.0				ヨコナギ		ハラケズリ	ヨコナギ		ヨコナギ		
103	杯	甕	14.0				ヨコナギ		ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ		
104	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	14.0			2.3	ヨコナギ		ハラケズリ	ヨコナギ		ヨコナギ		
105	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	15.0				ヨコナギ			ヨコナギ				
106	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	15.2				ヨコナギ			ヨコナギ				
107	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	15.0			2.2	ヨコナギ			ヨコナギ				
108	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	16.0			2.6	ヨコナギ		ハラケズリ	ヨコナギ				
109	杯	S.K.139 ワタエ	16.0				ヨコナギ		ナゲ	ヨコナギ		ヨコナギ		軽量感か?
110	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	16.4			1.6	ヨコナギ		ヨコナギ	ヨコナギ		ナゲ		
111	杯	甕	17.2				ヨコナギ			ヨコナギ				
112	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	17.8				ヨコナギ			ヨコナギ				
113	杯	S.K.161 ワタエ	20.0				ヨコナギ		ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ		
114	杯	甕	18.4			1.2	ヨコナギ			ヨコナギ				
115	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	11.6			1.6	ヨコナギ		ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ		
116	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	14.4			2.6	ヨコナギ		ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ		
117	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	12.0				ヨコナギ		ハラケズリ	ヨコナギ		ヨコナギ		軽量感か?
118	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	6.0				ヨコナギ			ヨコナギ				
119	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	14.2			2.4	ヨコナギ		ハラケズリ	ヨコナギ		ヨコナギ		
120	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	12.0				ヨコナギ		ナゲ	ヨコナギ		ナゲ		
121	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	13.0				ヨコナギ		ハラケズリ	ヨコナギ		ナゲ		
122	杯	甕	12.4			0.8	ヨコナギ		ナゲ	ヨコナギ		ヨコナギ		
123	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	14.2			1.5	ヨコナギ		ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ		
124	杯	X.30-34 Y.15-19 4号	14.0			1.7	ナゲ		ハラケズリ	ヨコナギ		ヨコナギ		
125	杯	S.K.166 ワタエ	16.2				ヨコナギ			ヨコナギ				

番号	器種	出土区	法 量				成 形 · 調 整						備 考	
			口 径	肩部径	脚底径	器 高	外 面			内 面				
							口縁部	体 部	頂 部	脚-底部	口縁部	体 部	頂 部	
126	杯 盖	X30-39 Y10-14 4層	17.0				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
127	盃 盖	X30-34 Y10-19 4層	12.0			3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
128	杯 盖	X30-39 Y10-14 4層	16.0				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
129	杯 盖	W4-レ	11.0				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
130	杯 盖	無	13.6				ヨコナデ			ヨコナデ				
131	杯 盖	X30-34 Y15-19 4層	14.0			1.6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
132	杯 盖	X30-34 Y15-19 4層	16.0			2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
133	杯 盖	X30-34 Y15-19 4層	13.0				ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
134	杯 盖	X30-34 Y15-19 4層	17.2			2.3	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
135	杯 盖	X30-34 Y15-19 4層	15.0				ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	質面から後側にかけて 輪様な状況のキズあり
136	杯 盖	X30-34 Y15-19 4層	15.4			1.8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	軽微現
137	杯 盖	X30-34 Y10-14 4層	9.2			1.9							ヨコナデ	
138	杯 盖	X30-34 Y15-19 4層						ヨコナデ				ナデ	軽微現	
139	杯 盖	S D129 ヲヌ	24.0				ヨコナデ		ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
140	杯 A	X30-34 Y10-14	11.0		7.0	3.4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
141	杯 A	S D129 ヲヌ				8.6		ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
142	杯 A	W4-レ	12.8		7.4	3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
143	杯 A	S K141 ヲヌ	12.5		3.6	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
144	杯 A	X30-34 Y10-19 4層	15.0		10.0	4.8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
145	杯 A	S K158 ヲヌ	13.2		10.0	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
146	杯 A	S K181 ヲヌ	12.5		10.0	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
147	杯 A	S D125 ヲヌ	13.7		5.0	3.7	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
148	杯 A	X30-34 Y10-14 4層	13.8		4.2	4.0			ヘラキリ	ヨコナデ				
149	杯 A	W4-レ	13.4		10.0	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
150	杯 A	S D129 ヲヌ	16.0		5.0	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
151	杯 A	X30-34 Y10-14 4層	10.6		5.6	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
152	杯 A	X30-34 Y10-19 4層	12.0		9.0	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	
153	杯 A	X30-34 Y15-19 4層	12.0		8.4	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
154	杯 A	X30-34 Y10-14 4層	12.0		8.4	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
155	杯 A	X30-34 Y10-14 4層	12.8		8.2	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	

番号	器種	出土区	法量				成形・調整						備考	
			口径	脇部径	脚底径	器高	外面			内面				
							口縁部	体部	頂部	脚・底部	口縁部	体部	頂部	脚・底部
156	杯 A	X30-34 Y15-19 4号	11.9		8.1	3.4	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
157	杯 A	S D127 ワタエ	12.8		9.0	3.2	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
158	杯 A	X35-39 Y10-14 4号	12.6		9.4	3.0	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
159	杯 A	S K161 ワタエ	13.0		9.0	3.4	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ			ヨコナギ
160	杯 A	X30-34 Y10-14 4号	12.2		9.0	3.1	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
161	杯 A	M3-1レ	12.8		8.0	3.5	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
162	杯 A	X30-34 Y15-19 4号	10.8		7.4	2.8	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
163	杯 A	M3-1レ	11.6		6.8	3.1	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
164	杯 A	X30-34 Y15-19 4号	12.0		8.4	3.2	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
165	杯 A	S D126 ワタエ	12.0		8.6	3.2	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ			ヨコナギ
166	杯 A	X30-34 Y10-14 4号	12.7		9.0	3.0	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
167	杯 A	X30-34 Y15-19 4号	12.0		7.8	3.5	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
168	杯 A	X35-39 Y10-14 4号	12.8		9.8	3.0	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
169	杯 A	X30-34 Y15-19 4号	12.8		9.2	3.2	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
170	杯 A	X30-34 Y15-19 4号	12.9		9.0	3.0	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
171	杯 A	X35-39 Y10-14 4号	12.7		8.4	3.6	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
172	杯 A	S D129 ワタエ	13.6		10.0	3.7	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
173	杯 B	X30-34 Y15-19 4号	9.8		6.0	4.2	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
174	杯 B	M3-1レ				7.8				ヨコナギ ヘラキリ				ヨコナギ
175	杯 B	X30-34 Y15-19 4号				8.0		ヨコナギ		ヨコナギ ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
176	杯 B	M3-1レ				9.6		ヨコナギ		ヘラキリ ヨコナギ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
177	杯 B	X30-34 Y10-14 4号	12.8		9.1	3.1	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
178	杯 B	S D126 ワタエ	13.2		9.6	4.0	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ ヨコナギ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
179	杯 B	S K161 ワタエ	13.2		7.8	3.8	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
180	杯 B	X30-34 Y15-19 4号	14.0		8.2	6.6	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ナゲ
181	杯 B	S K161 ワタエ	10.0		3.4	4.0	ヨコナギ			ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
182	杯 B	X30-34 Y15-19 4号	16.0		9.2	6.0	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
183	杯 B	M3-1レ				6.9		ヨコナギ		ヨコナギ ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
184	杯 B	X30-34 Y15-19 4号	11.0		7.4	3.3	ヨコナギ	ヨコナギ		ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ
185	杯 B	S D126 ワタエ	9.8		5.8	4.1	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ ヘラキリ	ヨコナギ	ヨコナギ		ヨコナギ

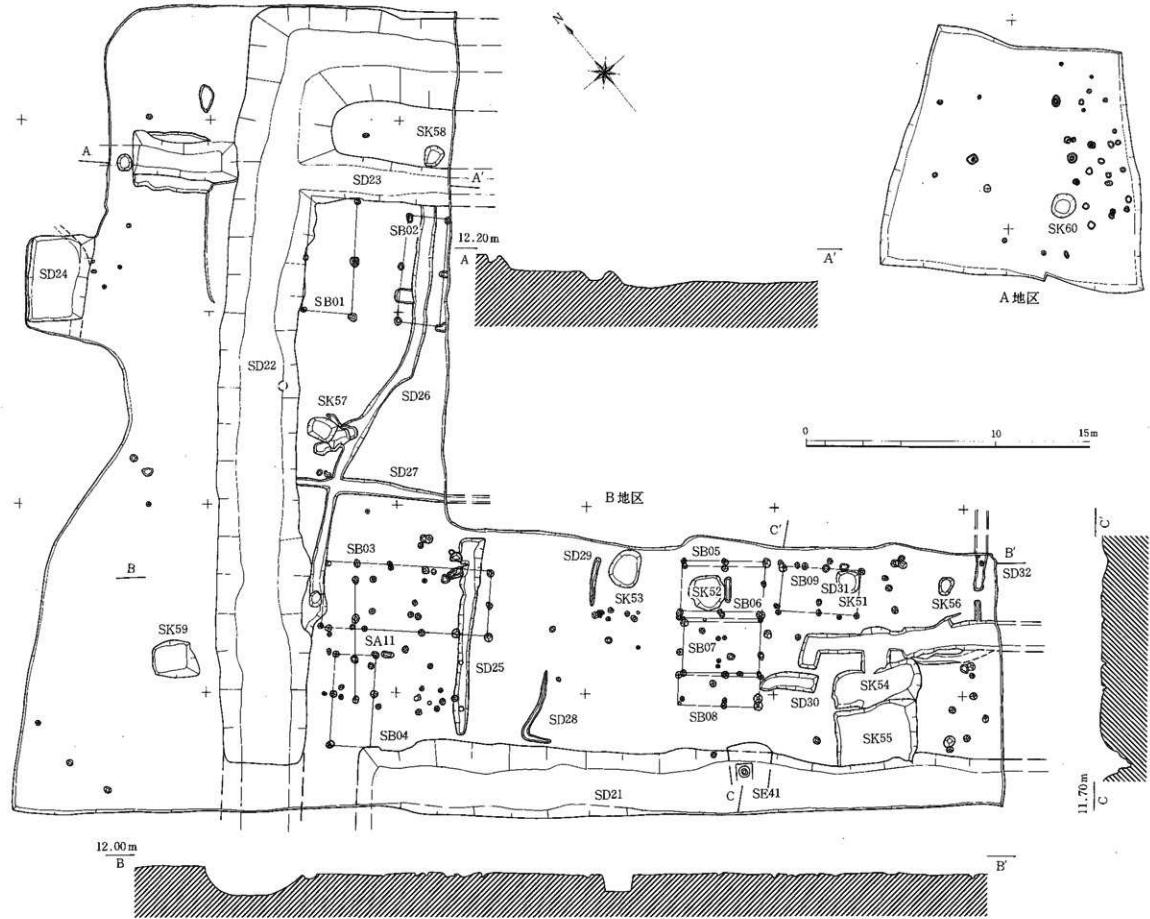
番号	器種	出土区	法 量				成 形・調 整						備 考	
			口 径	胴部径	脚底径	脚 高	外 面			内 面				
							口縁部	体 部	頂 部	脚・底部	口縁部	体 部	頂 部	
186	杯 B	試コトレ	11.8		7.8	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ ヘラキリ		ヨコナデ		ヨコナデ
187	杯 B	S K141 フクヒ	11.6		7.2	3.4	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ ヘラキリ		ヨコナデ		ヨコナデ
188	杯 B	S K144 フクヒ			8.0					ヘラキリ ヨコナデ				ヨコナデ
189	杯 B	X 30-34 Y 15-19 4号	13.0		7.8	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
190	杯 B	試コトレ	12.7		8.0	4.4		ヨコナデ		ヘラキリ ヨコナデ		ヨコナデ		ヨコナデ
191	杯 B	X 30-34 Y 15-19 4号			8.0		ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
192	杯 B	X 30-34 Y 15-19 4号	13.4		7.0	4.8	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
193	杯 B	X 30-34 Y 15-19 4号	13.4		9.0	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
194	杯 B	X 30-34 Y 15-19 4号			6.6			ヨコナデ				ヨコナデ		
195	皿	試コトレ	13.0		7.0	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラキリ	ヨコナデ			ヨコナデ
196	杯 B	X 30-34 Y 15-19 4号	12.8		7.0	4.1	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
197	杯 B	試コトシ			8.8					ヨコナデ ヘラキリ				ヨコナデ
198	杯 B	縁厚部分			6.6			ヨコナデ		ヨコナデ ヘラキリ		ヨコナデ		ヨコナデ
199	杯 B	試コトレ	9.7		5.6	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
200	杯 B	X 30-34 Y 15-19 4号			6.4			ヨコナデ		ヨキリ		ヨコナデ		ヨコナデ
201	杯 B	X 30-34 Y 15-19			6.0		ヨコナデ	ヨコナデ		ナダ	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ
202	杯 B	試コトシ			6.4			ヨコナデ		ヨコナデ ヨキリ		ヨコナデ		ヨコナデ
203	杯 B	X 30-34 Y 15-14 4号	13.8		8.6	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデ ヘラキリ		ヨコナデ		ヨコナデ
204	杯 B	X 30-34 Y 15-14 4号	14.4		9.8	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ		ヘラキリ	ヨコナデ	ヨコナデ		ナダ
205	壺	S K141 フクヒ	7.0				ヨコナデ				ヨコナデ			
206	壺	S K141 フクヒ	10.0				ヨコナデ				ヨコナデ			
207	壺	試コトレ	10.0				ヨコナデ				ヨコナデ			
208	壺	試コトレ	11.8				ヨコナデ				ヨコナデ			
209	壺	X 30-38 Y 15-19 4号	8.0	15.7			ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ	ヨコナデ		
210	壺	X 30-38 Y 15-19 4号		18.0			ヨコナデ				ヨコナデ			
211	瓶	S D129 南朝盤	20.0				ヨコナデ				ヨコナデ			
212	壺	S K152 フクヒ	26.6				ヨコナデ				ヨコナデ			
213	壺	試コトレ	19.8				ヨコナデ				ヨコナデ			
214	壺	試コトレ		25.6			ヨコナデ				ヨコナデ			
215	壺	X 30-34 Y 15-19		27.0	10.0		ヨコナデ				ヨコナデ			

番号	器種	出土区	法 量				成 形 - 調 整						備 考	
			外 面		内 面									
			口縁部	体 部	頂 部	脚・底部	口縁部	体 部	頂 部	脚・底部	口縁部	体 部	頂 部	
216	壺	X30-34 Y15-19 4層		20.0			ヨコナデ				ヨコナデ			
217	甕	S D126 ワタエ	28.9				ヨコナデ				ヨコナデ			
218	壺	鉢	9.5				ヨコナデ 平行テクニ カセノ				ヨコナデ ナア			
219	壺	M2トレ		15.6			ヨコナデ				ヨコナデ			側面上方に二本の平行花瓶あり
220	壺	X30-34 Y15-19 4層		15.0			ヨコナデ ヨコナデ				ヨコナデ ヨコナデ			体部に沈線あり
221	壺	X30-34 Y15-19 4層		10.4			ヨコナデ ヨコナデ				ヨコナデ ヨコナデ			
222	甕	S D126 ワタエ			11.0		ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ	ヨコナデ		
223	甕	X30-34 Y15-19 4層	18.0				ヨコナデ 平行テクニ カセノ				ヨコナデ			
224	甕	X30-34 Y15-19 4層	24.0				ヨコナデ 平行テクニ カセノ				ヨコナデ 同心円文			
225	甕	鉢トレ	19.3				ヨコナデ 平行テクニ カセノ				ヨコナデ 同心円文			
226	壺	X30-34 Y15-19 4層					平行テクニ カセノ				同心円文 ハセノ			
227	甕	S K161 ワタエ	18.6	30.1			ヨコナデ 平行テクニ カセノ				ヨコナデ 同心円文			
228	横 棚	X30-34 Y15-19 4層					平行テクニ カセノ				同心円文 ハセノ			
229	高 杯	S D126 ワタエ												ヨコナデ
230	壺	鉢トレ			7.0		ヨコナデ	ホカリ			ヨコナデ	ヨコナデ		
231	壺	X30-34 Y15-19 4層			7.4		ヨコナデ	ヘラカリ			ヨコナデ	ヨコナデ		
232	杯 B	鉢トレ			10.4		ヨコナデ	ヘラケズリ			ヨコナデ	ヨコナデ		

表4 第2次調査区の土師器観察表

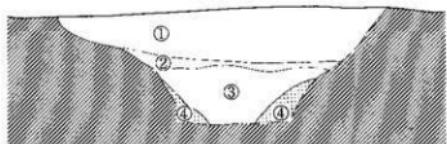
番号	器種	出土区	法 量				成 形 調 整						備 考	
			口 径	胸 部 径	胸 底 径	器 高	外 面			内 面				
							口縁部	胸上部	胸下部	胸・底部	口縁部	胸上部	胸下部	
301	甕	X30-34 Y15-19 4号	18.4	14.2			ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ	ヨコナデ		
302	甕	S D 101 ワタエ	15.0				ヨコナデ	ハケメ			カキメ	ハケメ		
303	甕	X30-34 Y15-19 4号	13.2	14.2			ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ	ヨコナデ		
304	甕	X30-34 Y15-19 4号	20.4	17.4			ヨコナデ	ハケメ			ヨコナデ	カキメ		
305	甕	S D 107 ワタエ	14.6				ヨコナデ	カキメ			ヨコナデ	カキメ		
306	甕	S D 107 ワタエ	13.0				ナデ	カキメ			ナデ	ハケメ		
307	甕	X30-34 Y15-19	28.0	31.2			ナデ	ナデ			ナデ	ナデ		
308	甕	X30-34 Y15-19 4号	12.0	12.4			ヨコナデ	ハケメ			ヨコナデ			
309	甕	X30-34 Y15-19 4号	14.0				ヨコナデ				ナデ			
310	甕	X30-34 Y15-19 4号	12.0	12.5			ナデ	ナデ			ナデ	ナデ		
311	甕	南区	25.0				ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ	ヨコナデ		
312	甕	試6トレ	22.2				ナデ	カキメ			ナデ	カキメ		
313	甕	X30-34 Y15-19 4号	24.0				ナデ	カキメ			ナデ	ナデ		
314	甕	X30-34 Y15-19 4号	11.0				ナデ	カキメ			ナデ	カキメ		
315	甕	S D 108 ワタエ	25.0	24.4			ヨコナデ	カキメ ハケメ			ヨコナデ	ハケメ		
316	堀	S E 101 ワタエ	36.4				ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ	ヨコナデ		
317	堀	X30-34 Y15-19 4号	31.8				ヨコナデ	カキメ	ヘラケズリ		ハケメ	ハケメ	ハケメ	
318	堀	X30-34 Y15-19 4号	36.0				ヨコナデ	カキメ	ヘラケズリ		ヨコナデ	カキメ	カキメ	
321	甕	X30-34 Y15-19 4号	40.0	38.4			ヨコナデ	カキメ	ヘラケズリ		ヨコナデ	カキメ		
322	甕	試6トレ			6.6				ヘラケズリ					
323	高 杯	試6トレ			7.0					ヨコナデ				
409	杯	X30-34 Y15-19 4号	13.2		5.0	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	カリ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	

# 図 版



図版1 第1次調査区の平面図

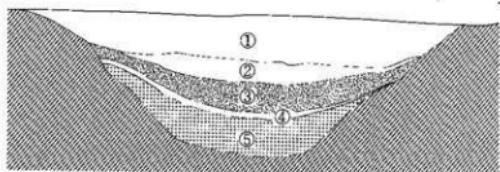
11.85m



- ① 褐色粘質土
- ② 黄褐色粘質土
- ③ 淡灰色砂質土
- ④ 灰色砂質土

SD23

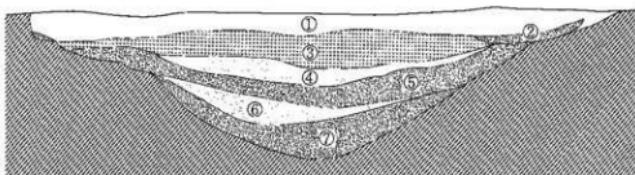
11.60m



- ① 黄色粘質土
- ② 黑褐色砂質土
- ③ 灰褐色砂質土
- ④ "
- ⑤ "

SD21

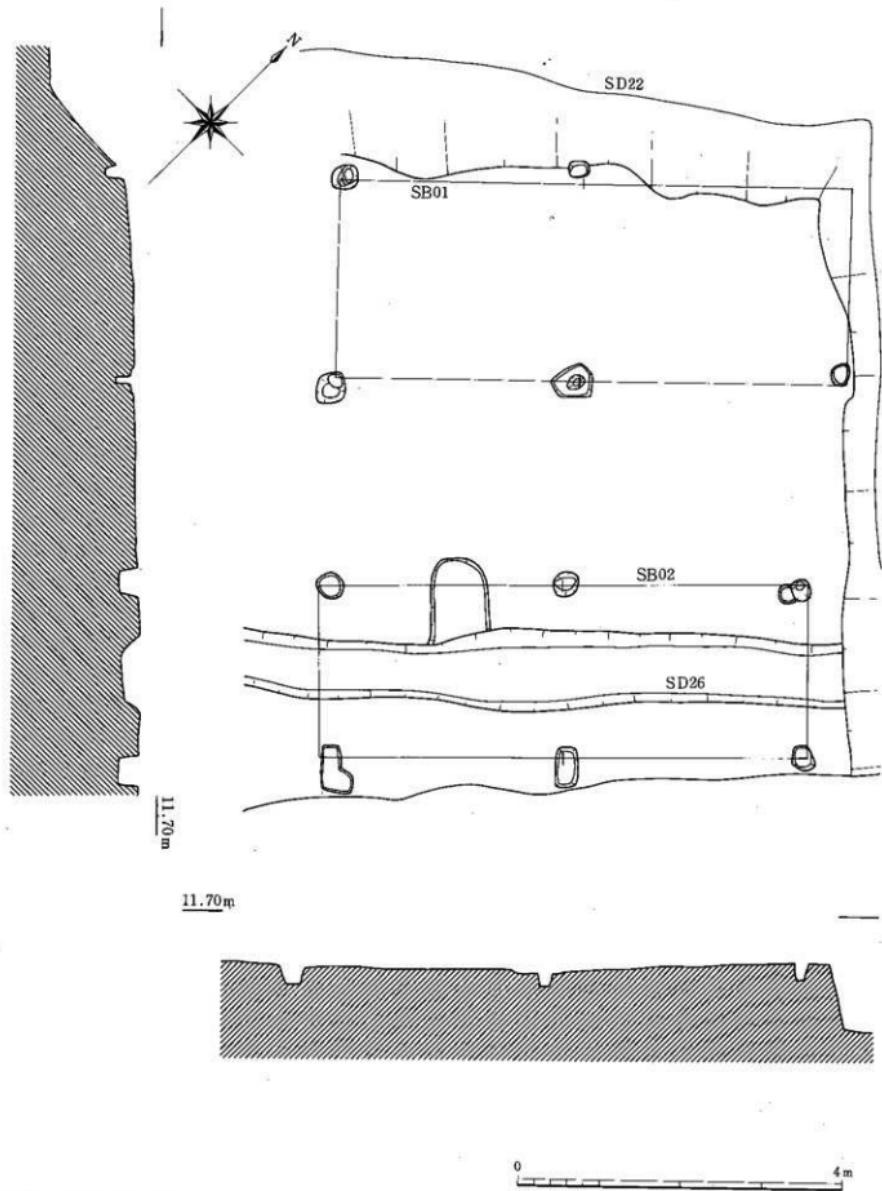
11.60m



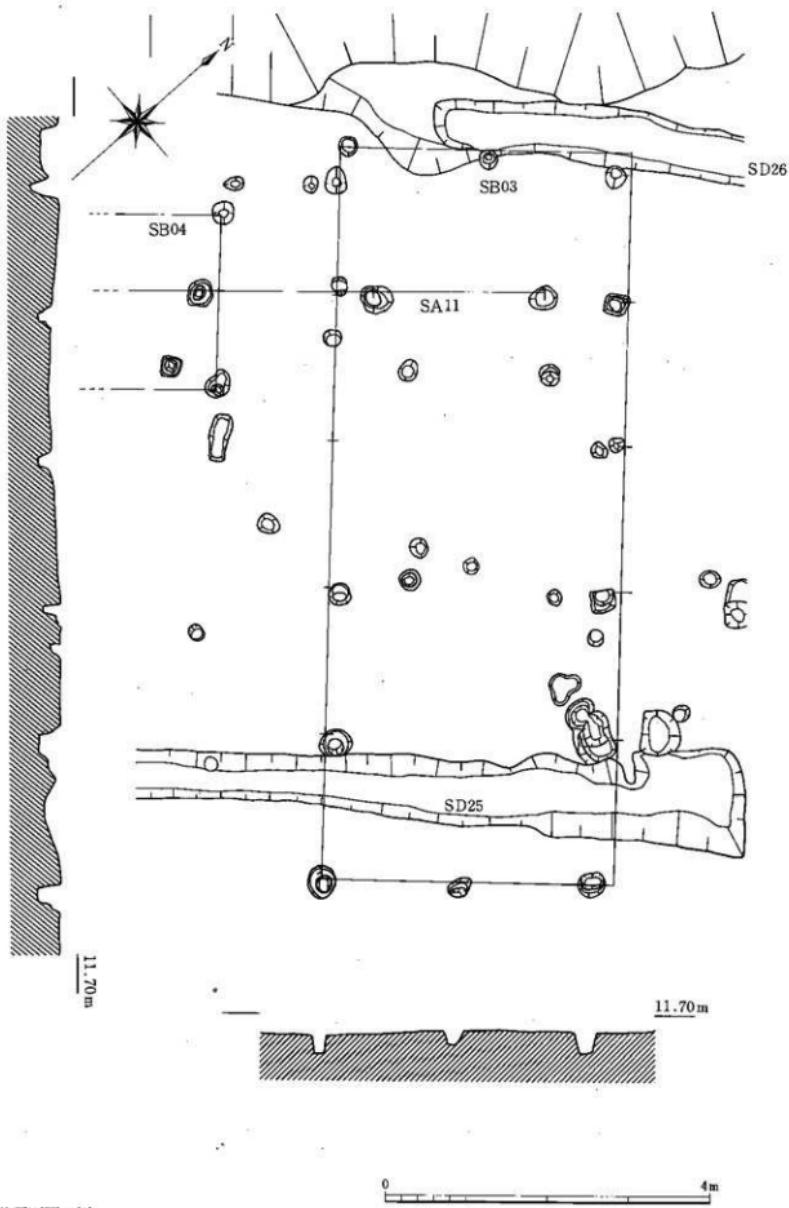
SD22

- ① 黄褐色砂質土
- ② 灰褐色砂質土
- ③ 灰色砂質土
- ④ 黑灰色砂質土
- ⑤ 灰褐色砂質土
- ⑥ 淡黑灰色砂質土
- ⑦ 灰褐色砂質土

図版2 溝の断面図

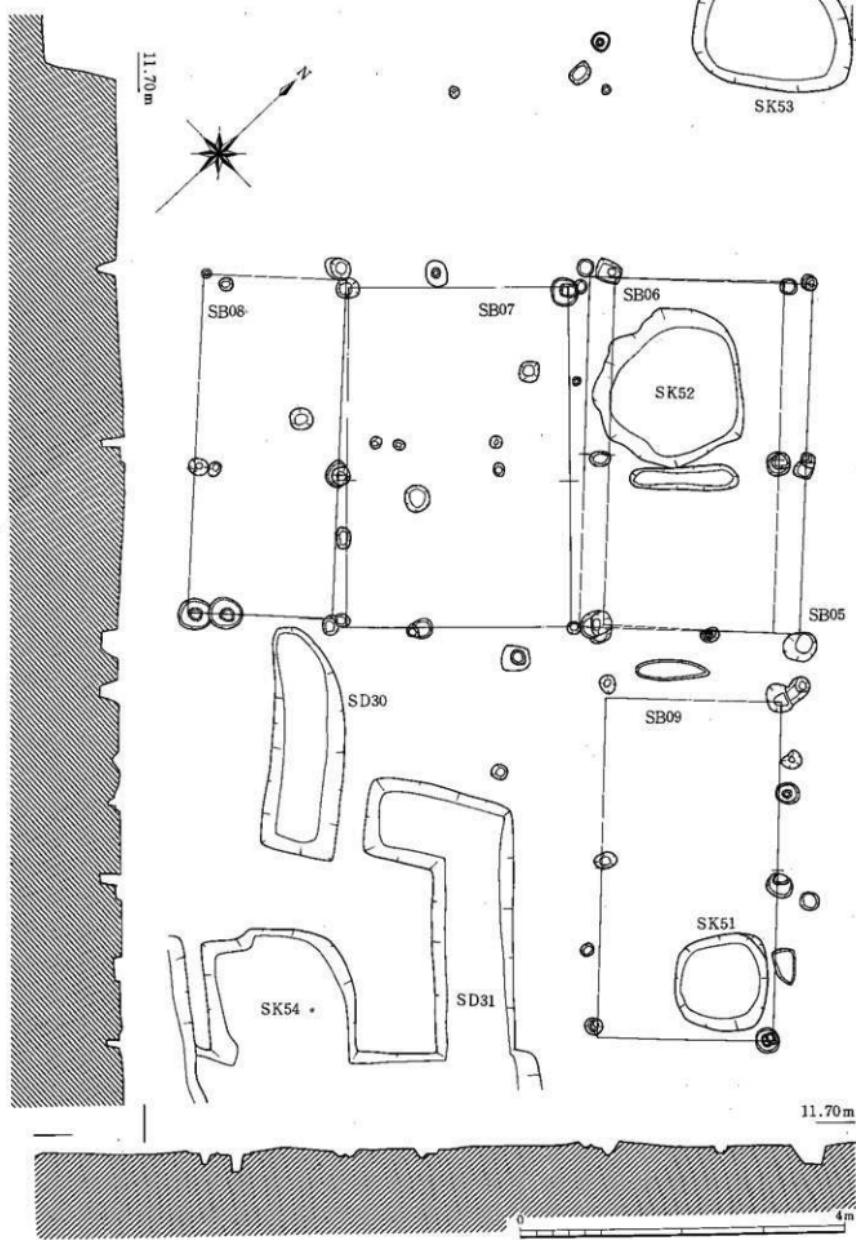


図版3 建物平面図 (1)



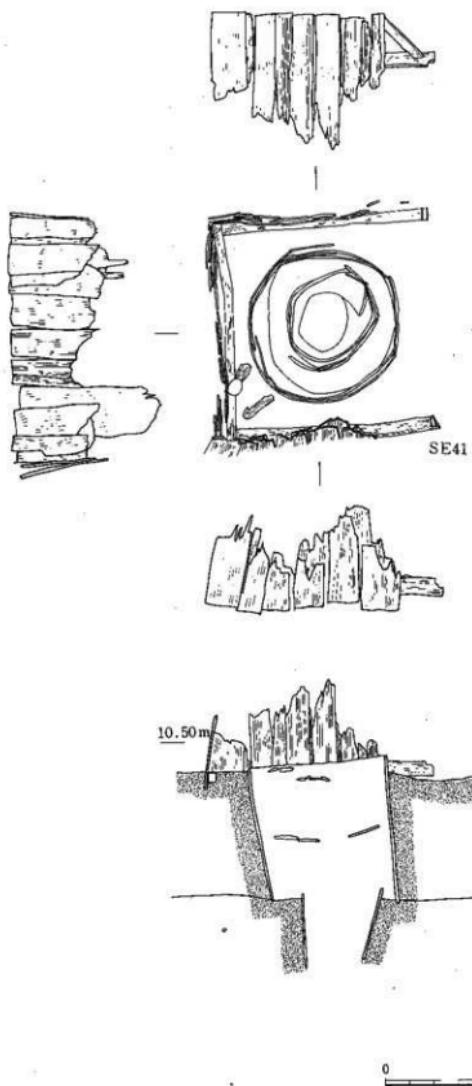
図版4 建物平面図 (2)





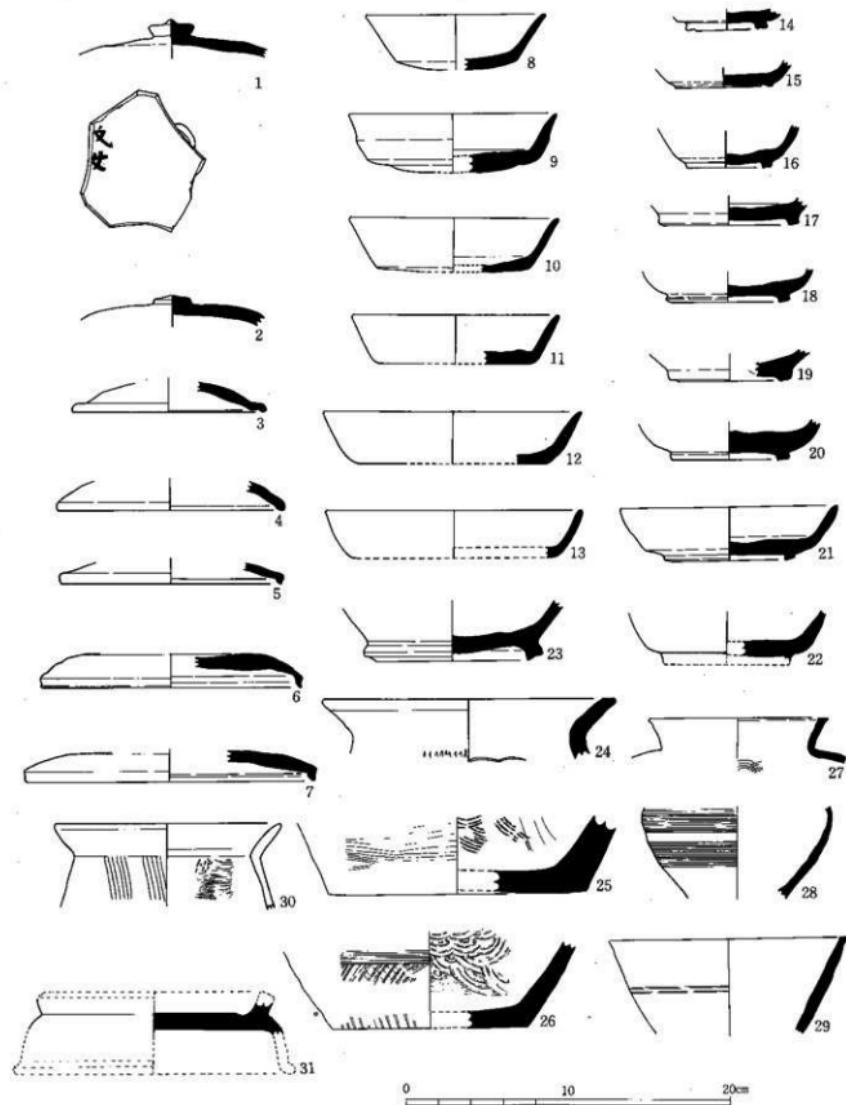
図版5 建物平面図 (3)



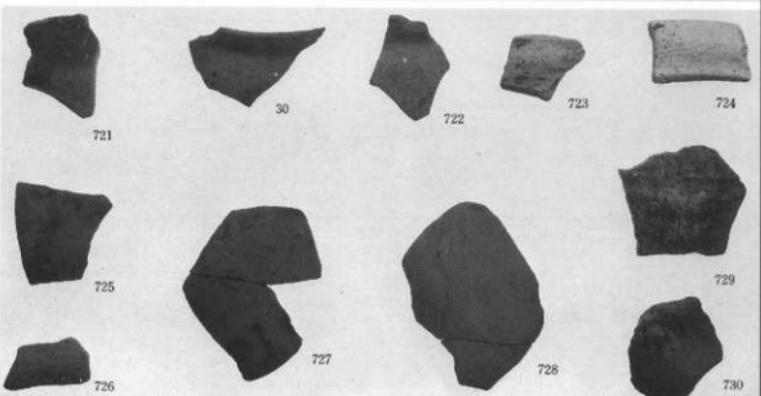
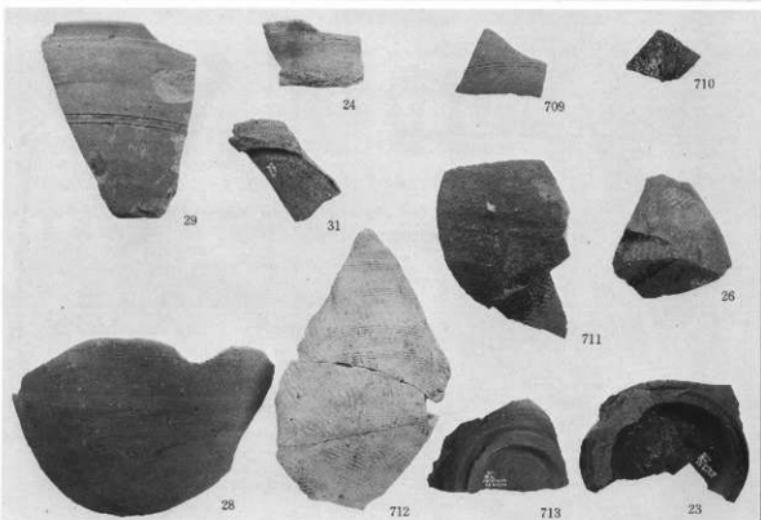
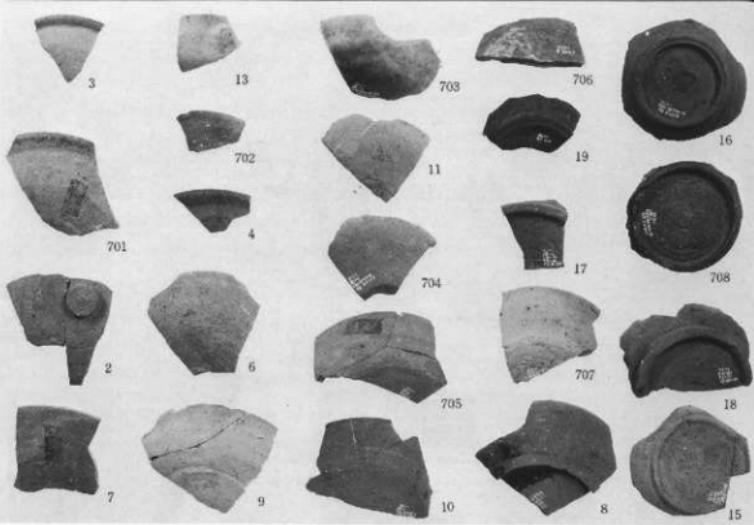


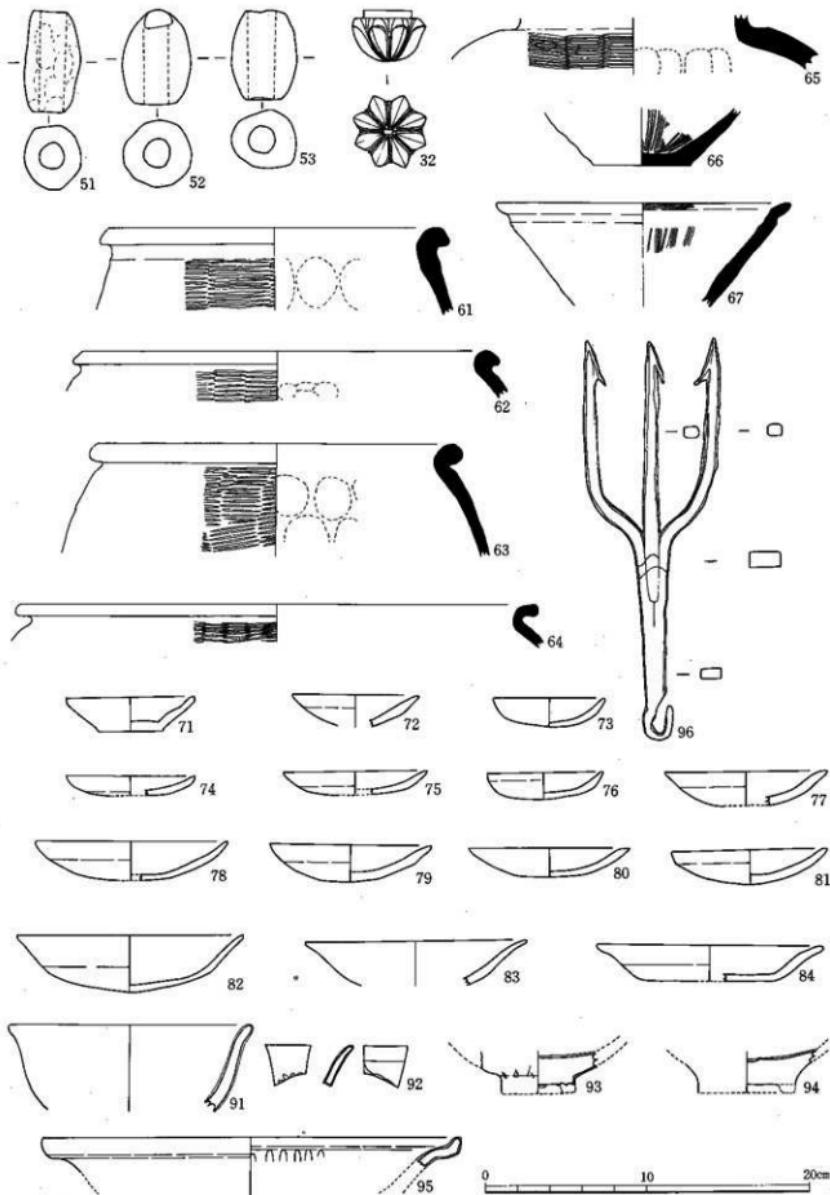
図版6 井戸実測図



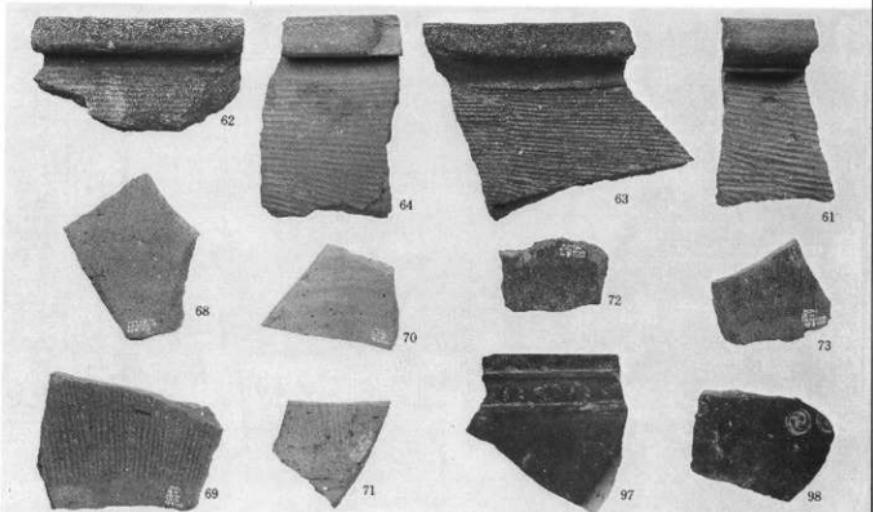
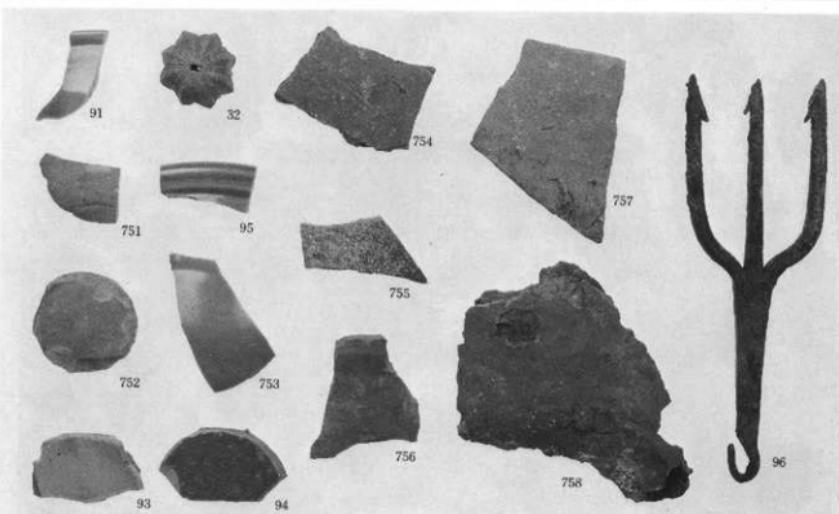
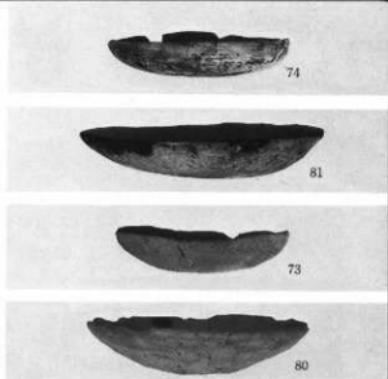
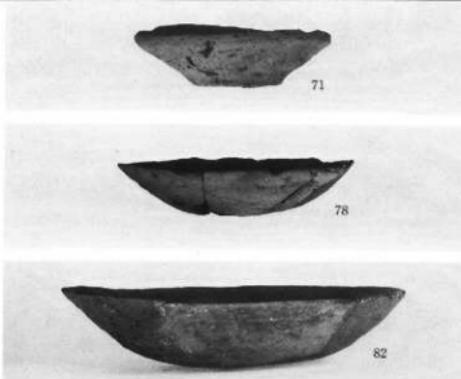


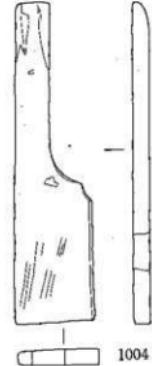
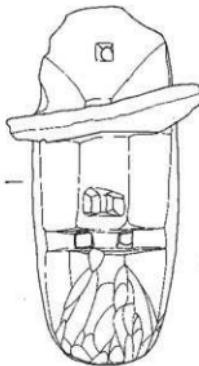
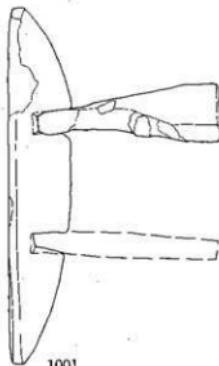
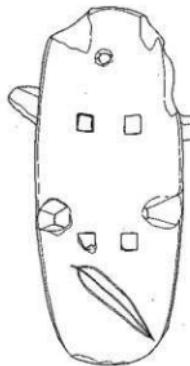
圖版7 遺物實測圖





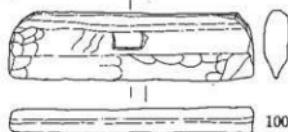
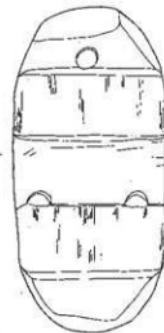
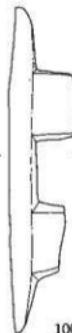
図版8 遺物実測図



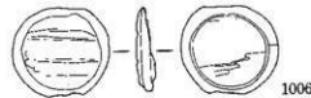


1001

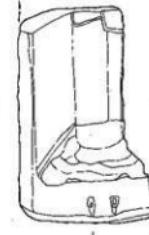
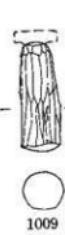
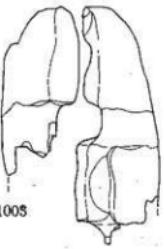
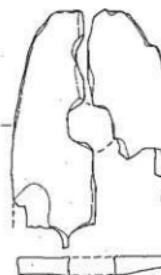
1004



1005



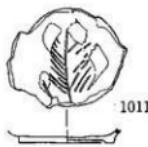
1006



1005

1009

1008



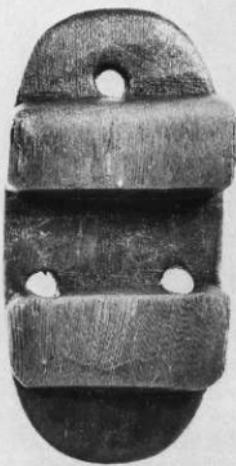
1011

0 10 15cm

圖版9 遺物実測図



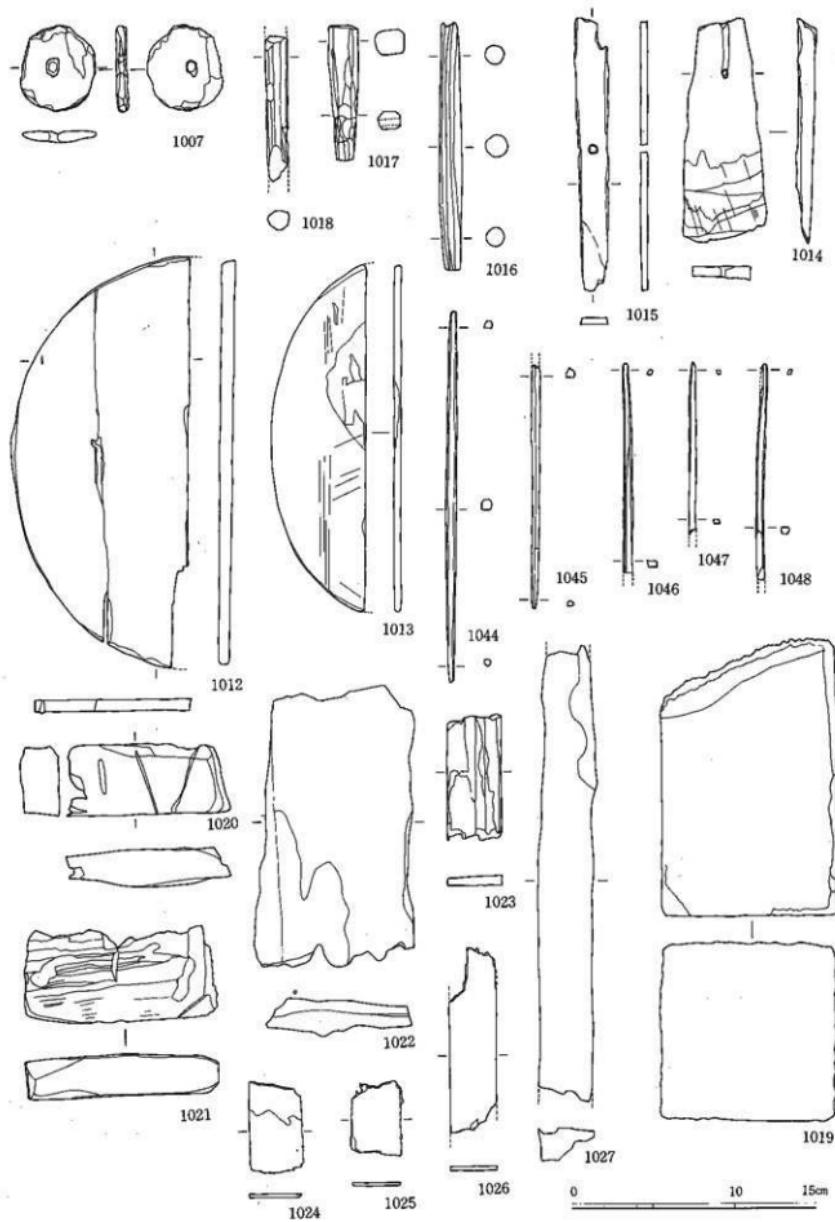
1001



1002



1003



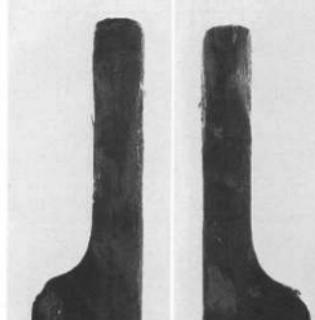
図版10 遺物実測図



1006

1007

1005

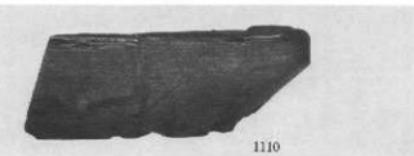


1008

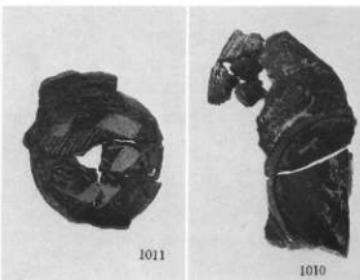
1004



1041



1110



1011

1049



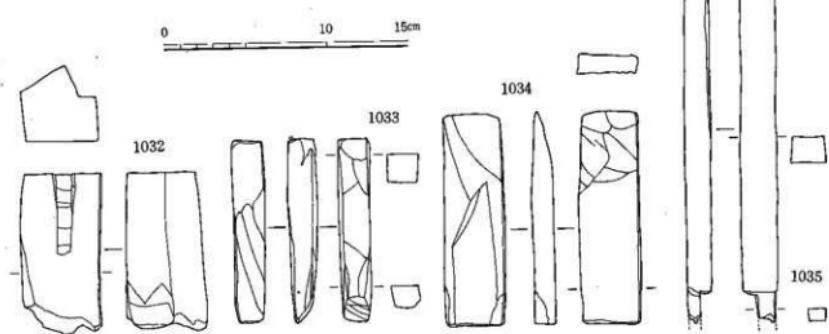
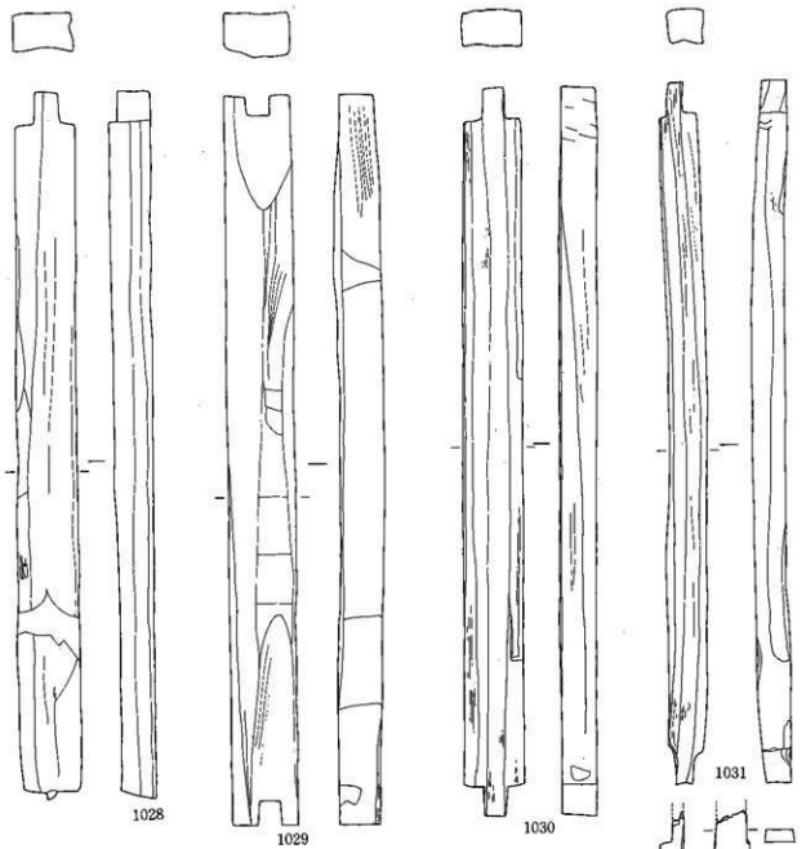
1111

1044

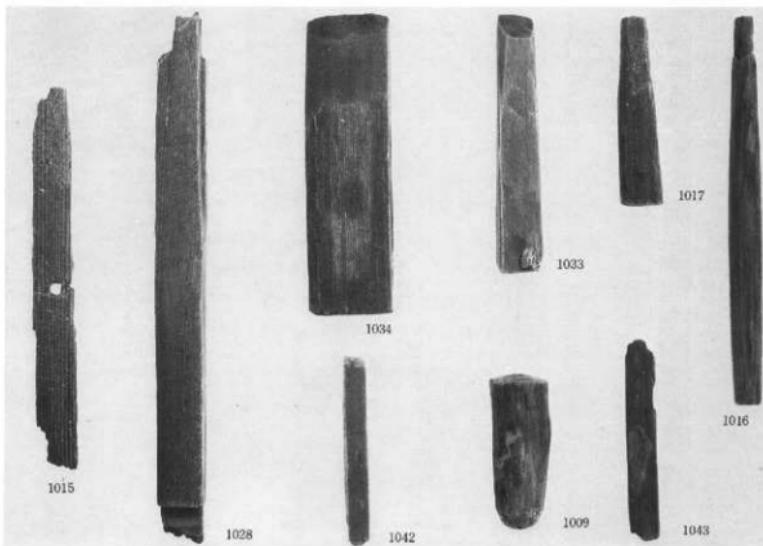
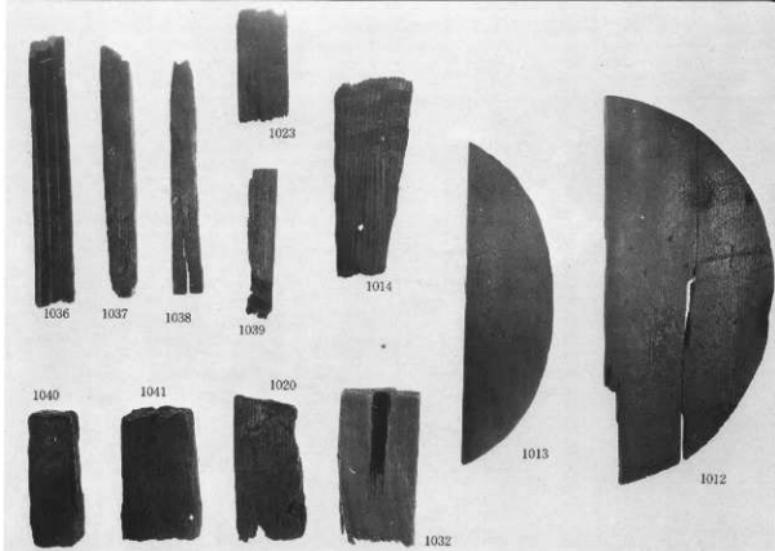


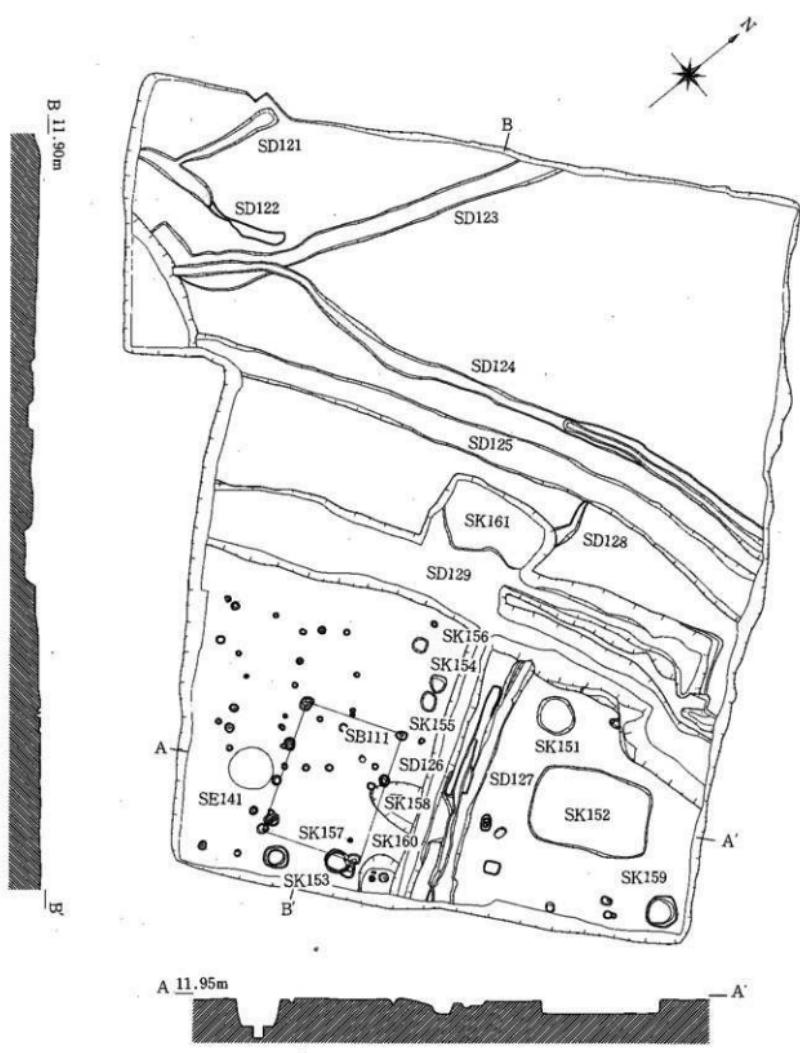
1045

1049



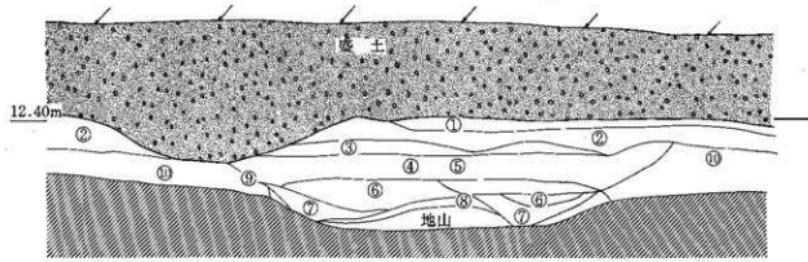
図版11 遺物実測図



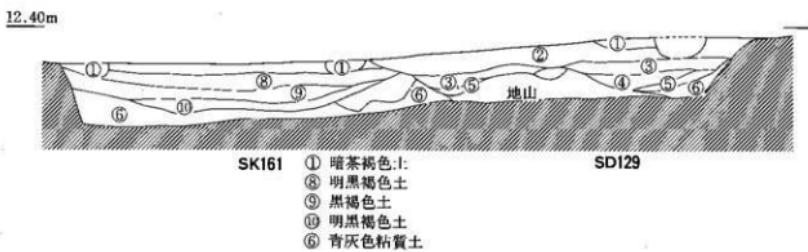


図版12 第2次調査区の平面図

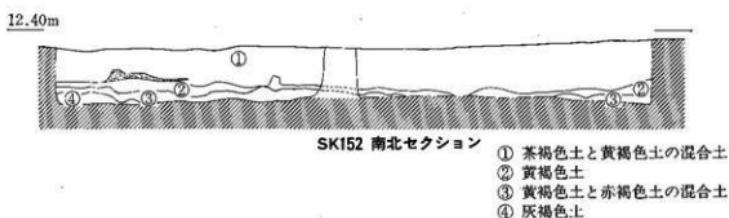




- |         |          |
|---------|----------|
| ① 暗茶褐色土 | ⑥ 黑褐色土   |
| ② 茶褐色土  | ⑦ 明黑褐色土  |
| ③ 明茶褐色土 | ⑧ 淡黑褐色土  |
| ④ 茶褐色土  | ⑨ 青灰色粘質土 |
| ⑤ 暗黑褐色土 | ⑩ 黄褐色土   |

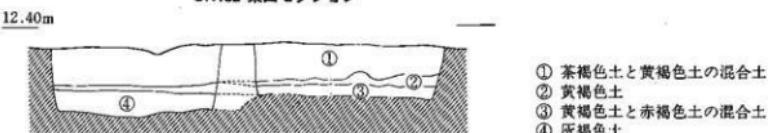


- |          |
|----------|
| ① 暗茶褐色土  |
| ② 明黑褐色土  |
| ③ 黑褐色土   |
| ④ 明黑褐色土  |
| ⑤ 青灰色粘質土 |



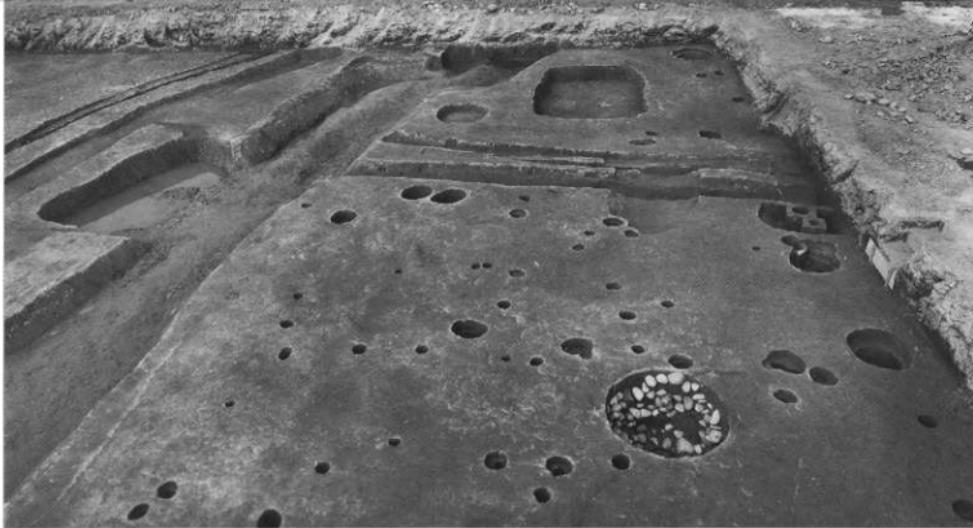
- |                 |
|-----------------|
| ① 茶褐色土と黄褐色土の混合土 |
| ② 黄褐色土          |
| ③ 黄褐色土と赤褐色土の混合土 |
| ④ 灰褐色土          |

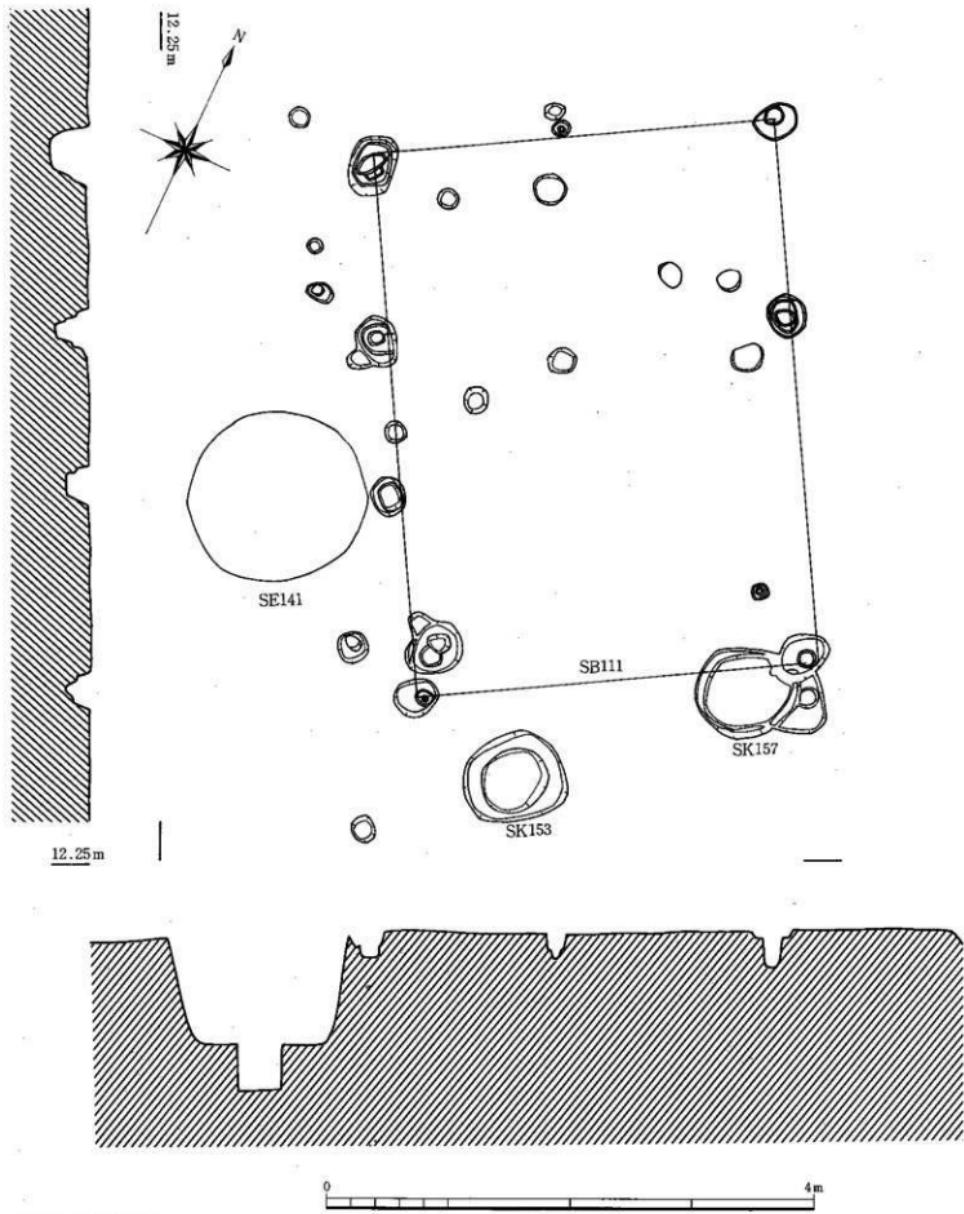
#### SK152 東西セクション



- |                 |
|-----------------|
| ① 茶褐色土と黄褐色土の混合土 |
| ② 黄褐色土          |
| ③ 黄褐色土と赤褐色土の混合土 |
| ④ 灰褐色土          |

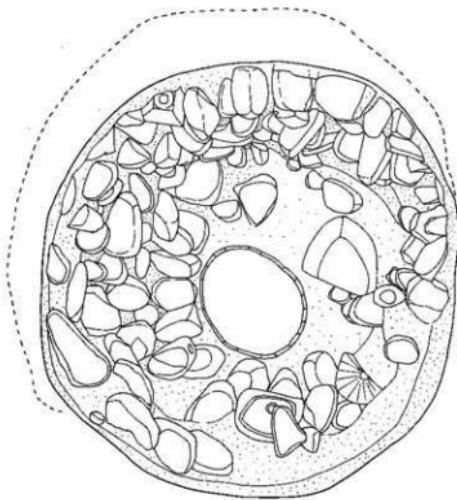
図版13 土層図



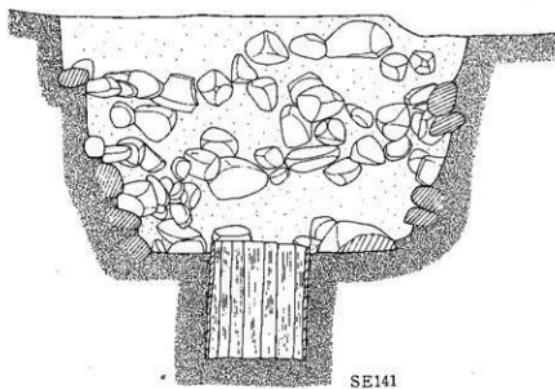


図版14 建物平面図





12.50m

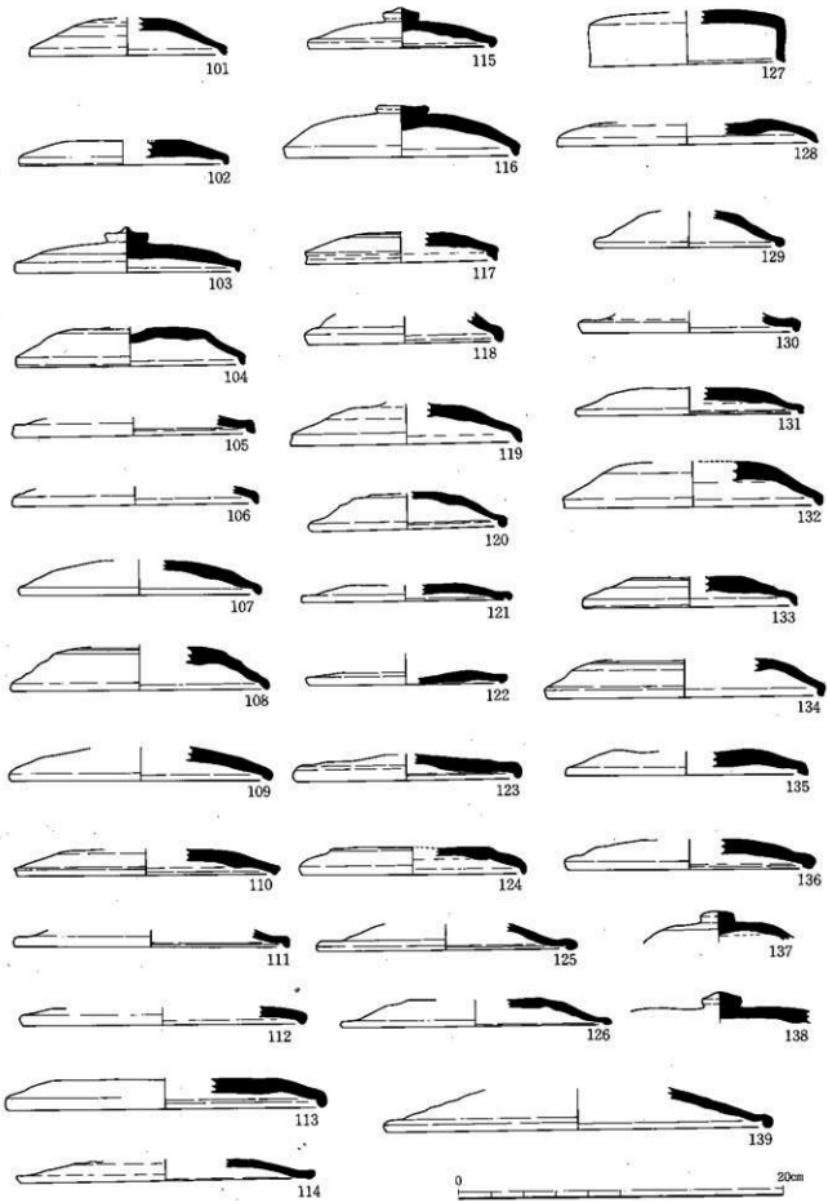


SE141

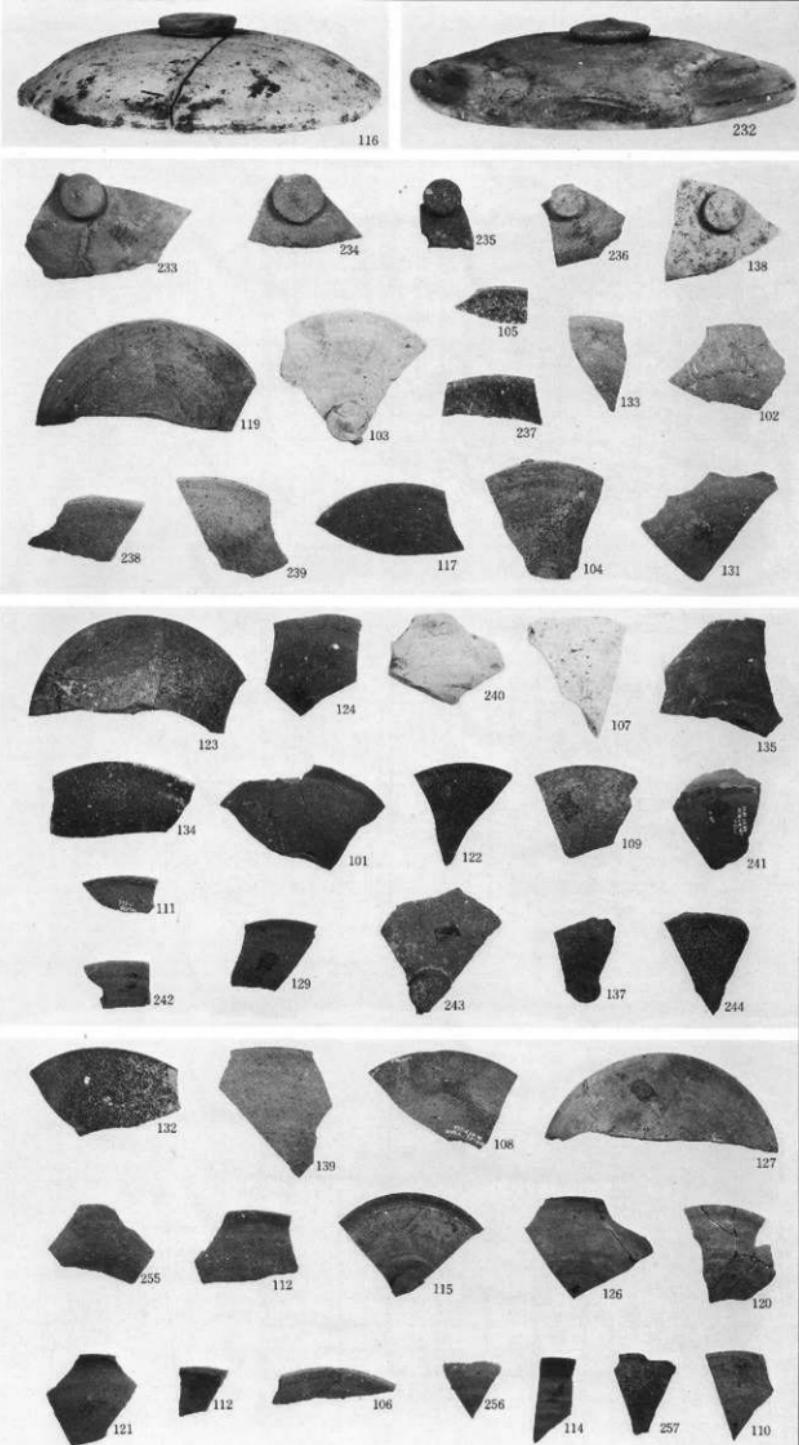
0 1m

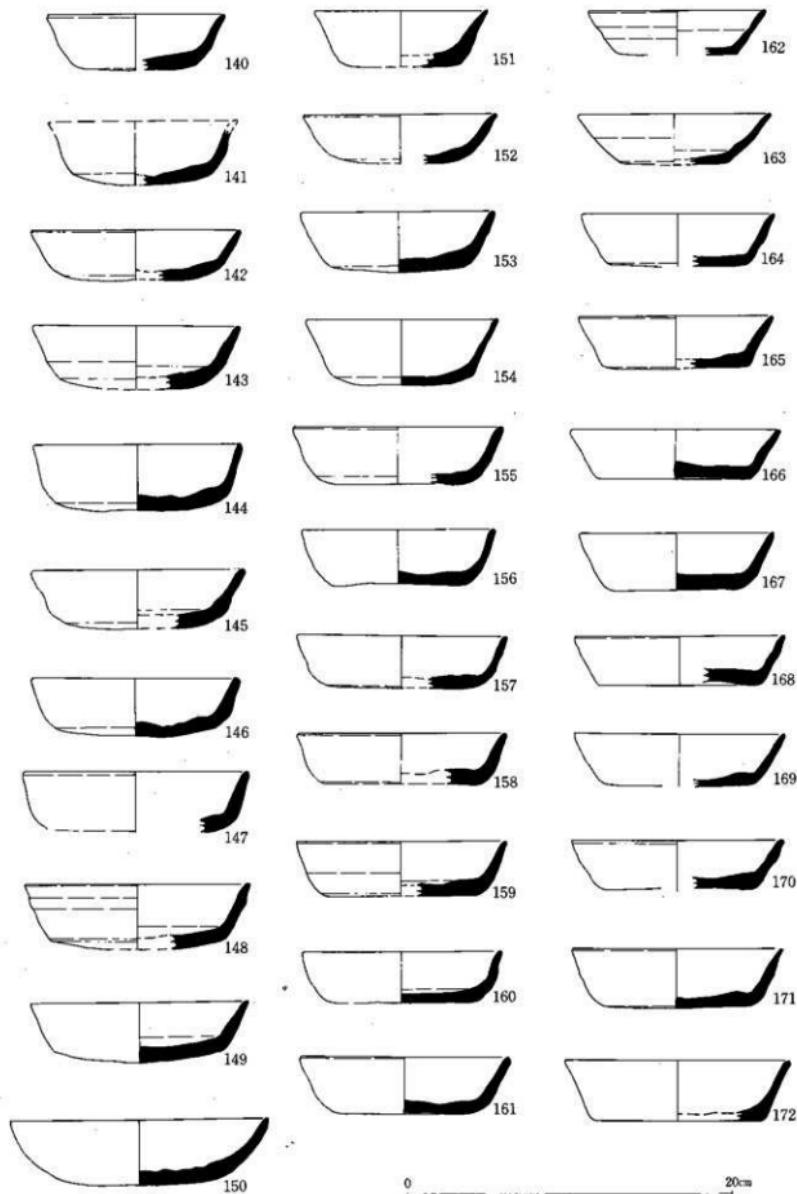
図版15 井戸実測図





図版16 遺物実測図





図版17 遺物実測図



258



160



259



261



167



262



260



154



144



263



142



264



157



265



147



266



162



267



268



170



271



269



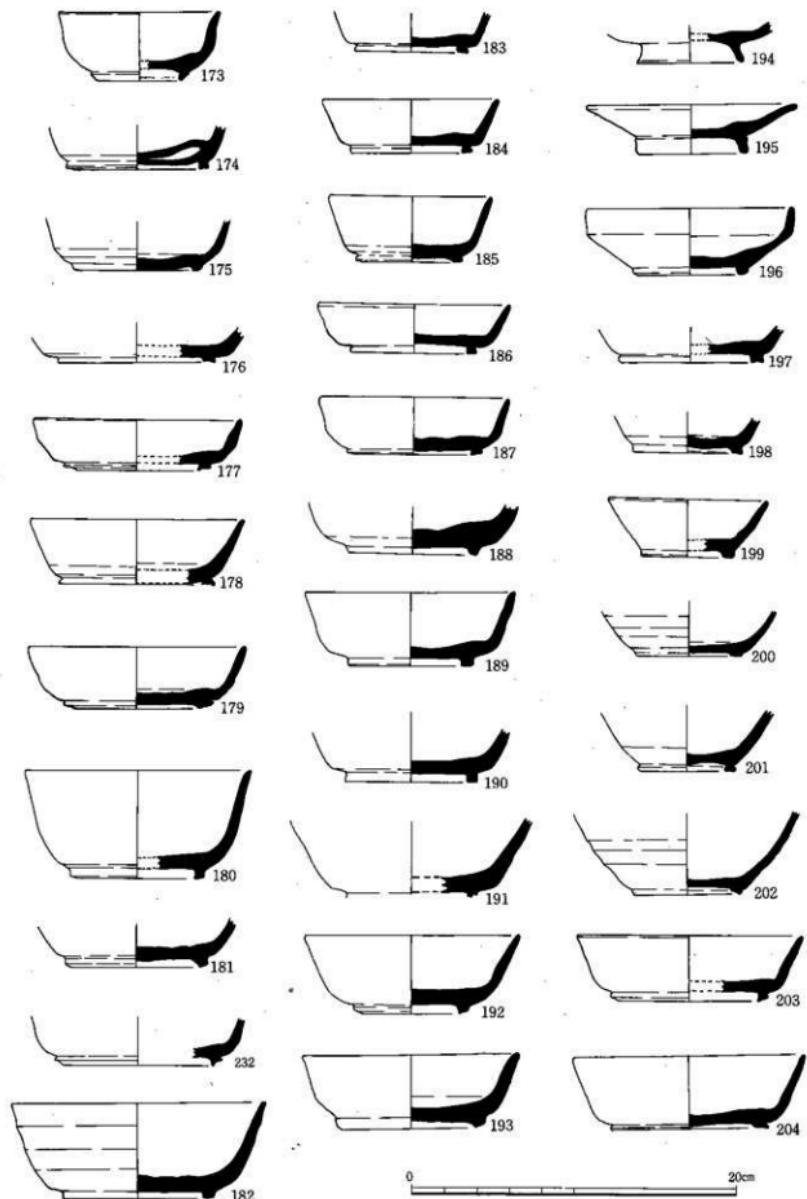
270



272



166



图版18 遗物实测图



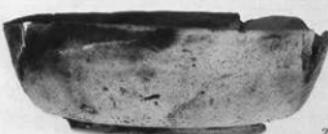
274



196



275



278



276



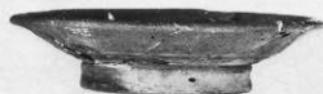
204



277



184



195



279



280



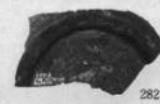
197



183



281



282



283



284



285



286



288



289



178



290



191



291



292



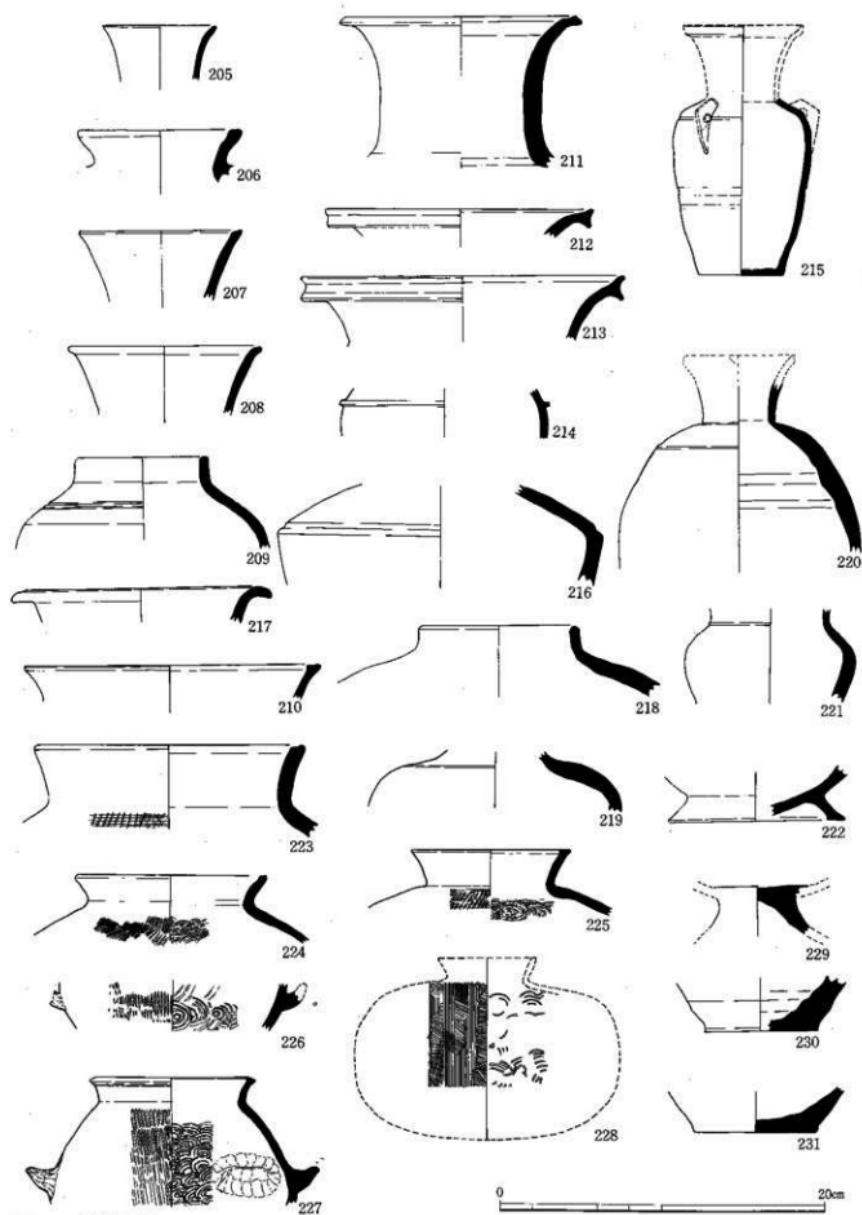
232



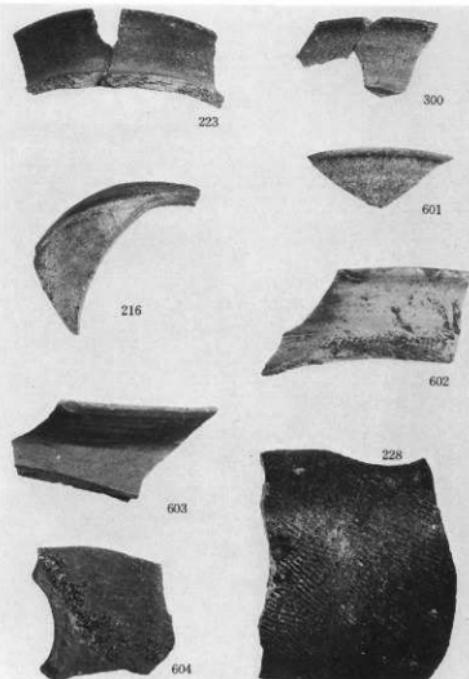
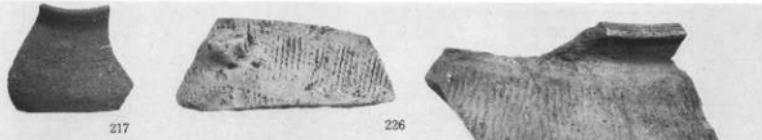
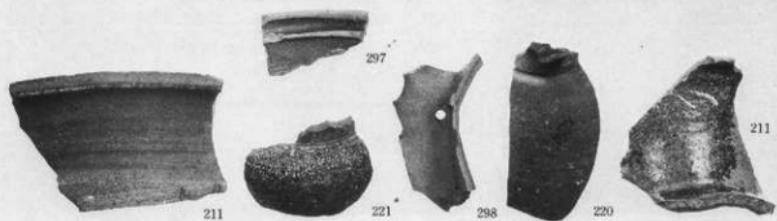
177

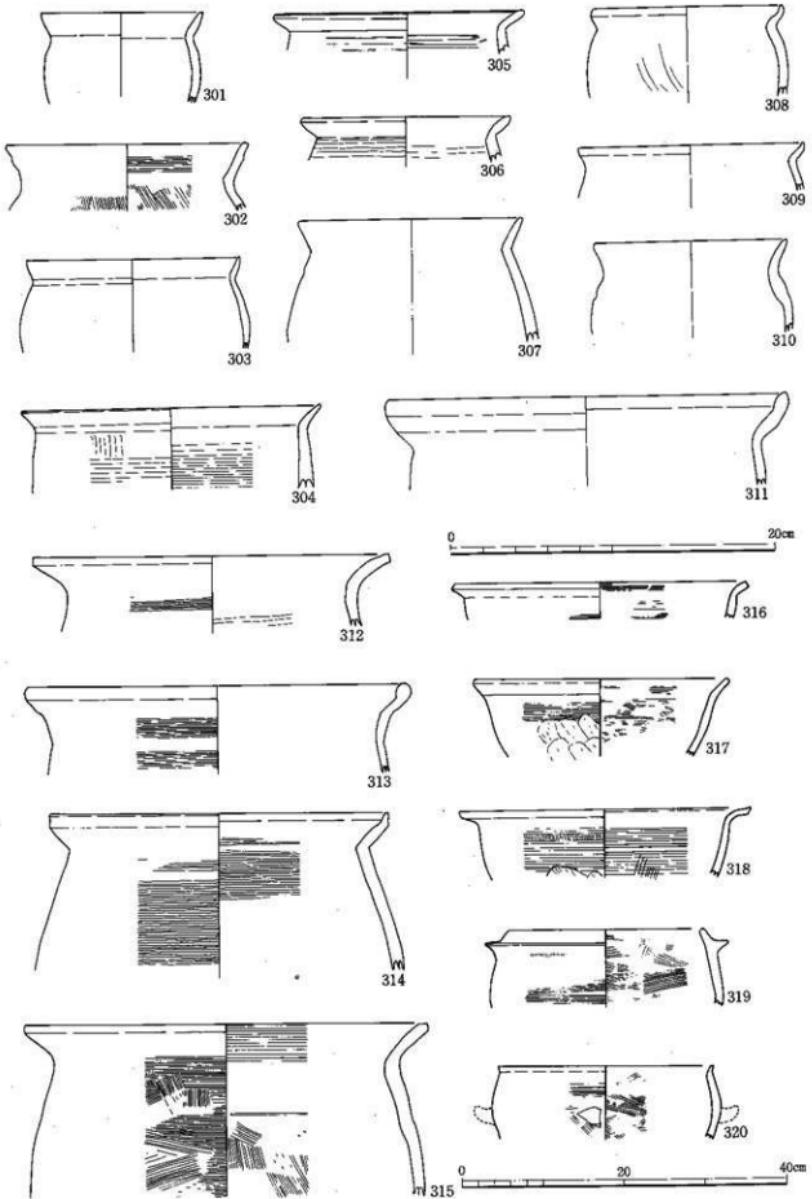


293

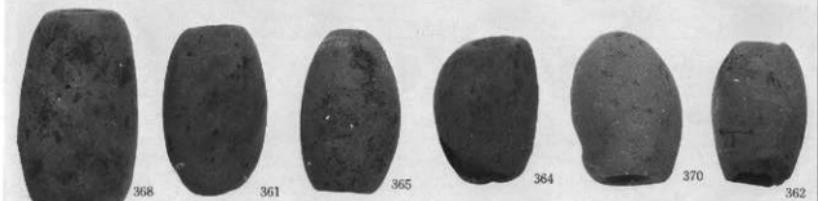
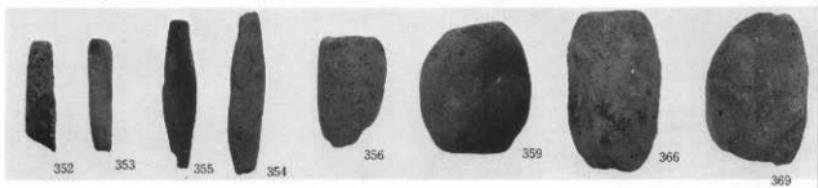
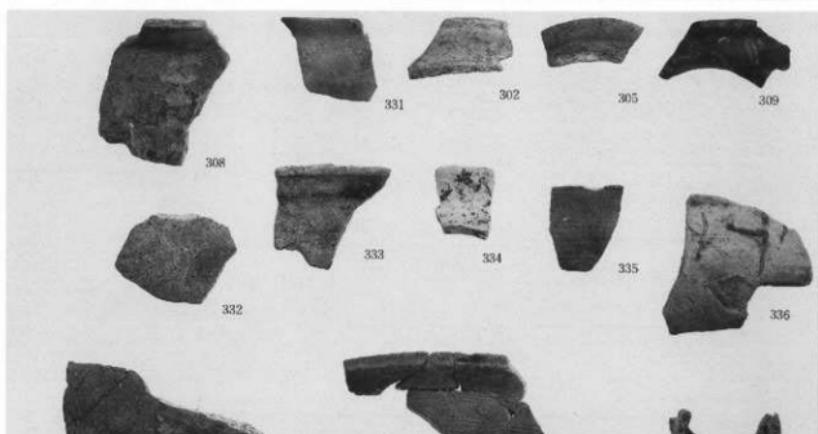
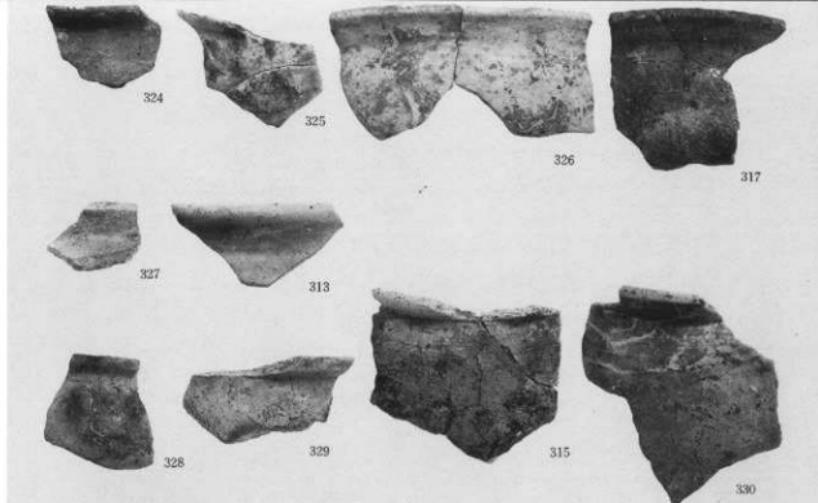


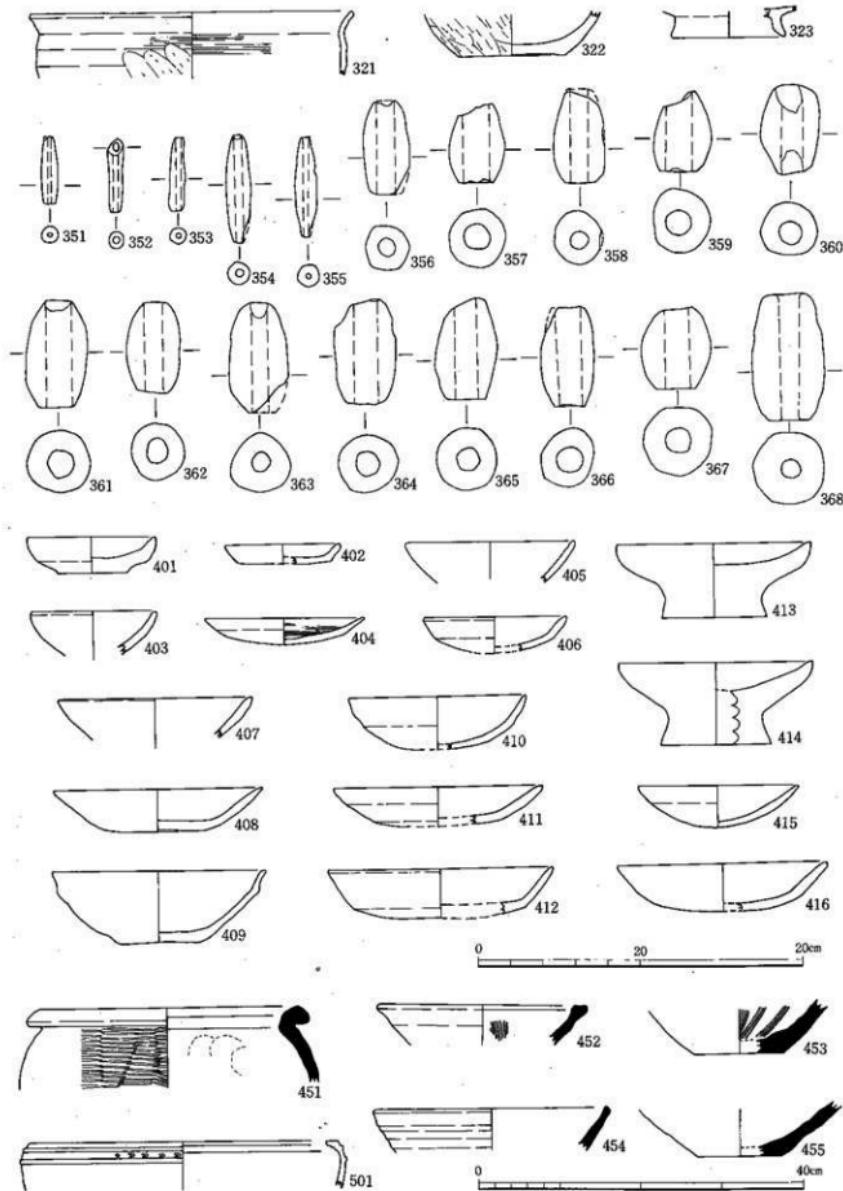
図版19 遺物実測図





図版20 遺物実測図





図版21 遺物実測図



451



456



457



458



459



452



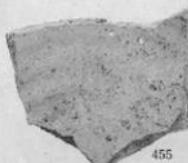
453



454



455



456



457



458



414



409



413



409



417



418



411



410



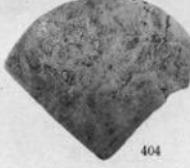
415



419



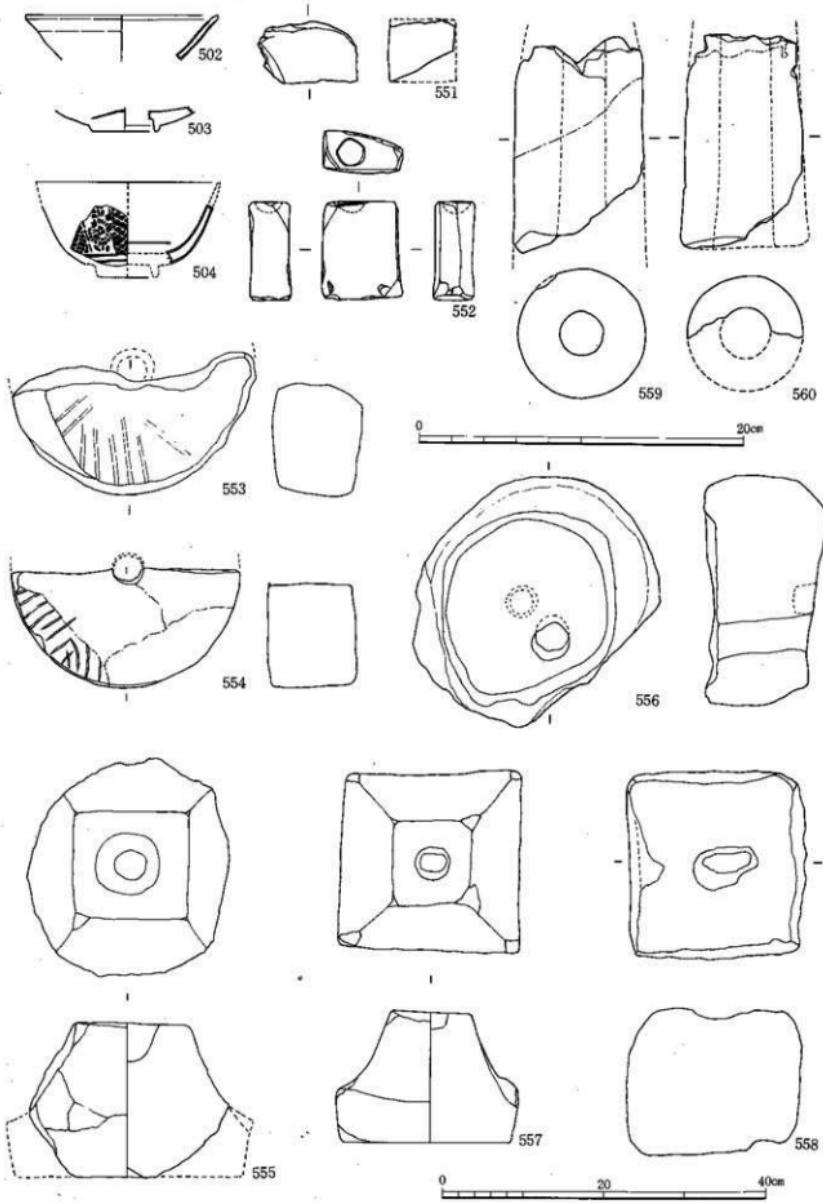
420



404



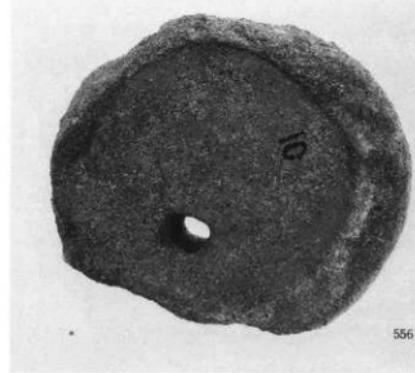
416



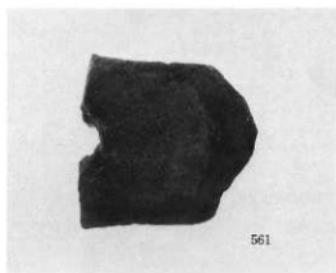
圖版22 遺物実測図



567



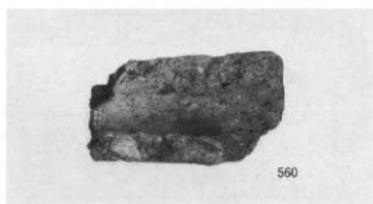
556



561



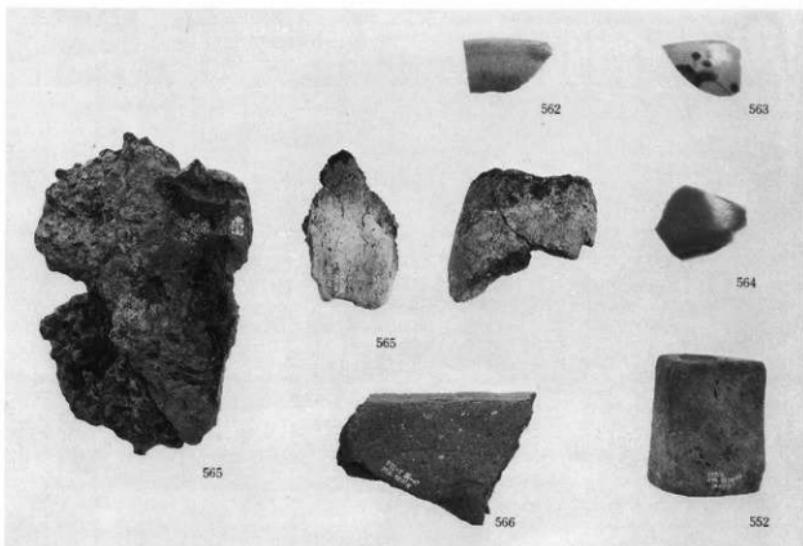
554



560



553



562

563

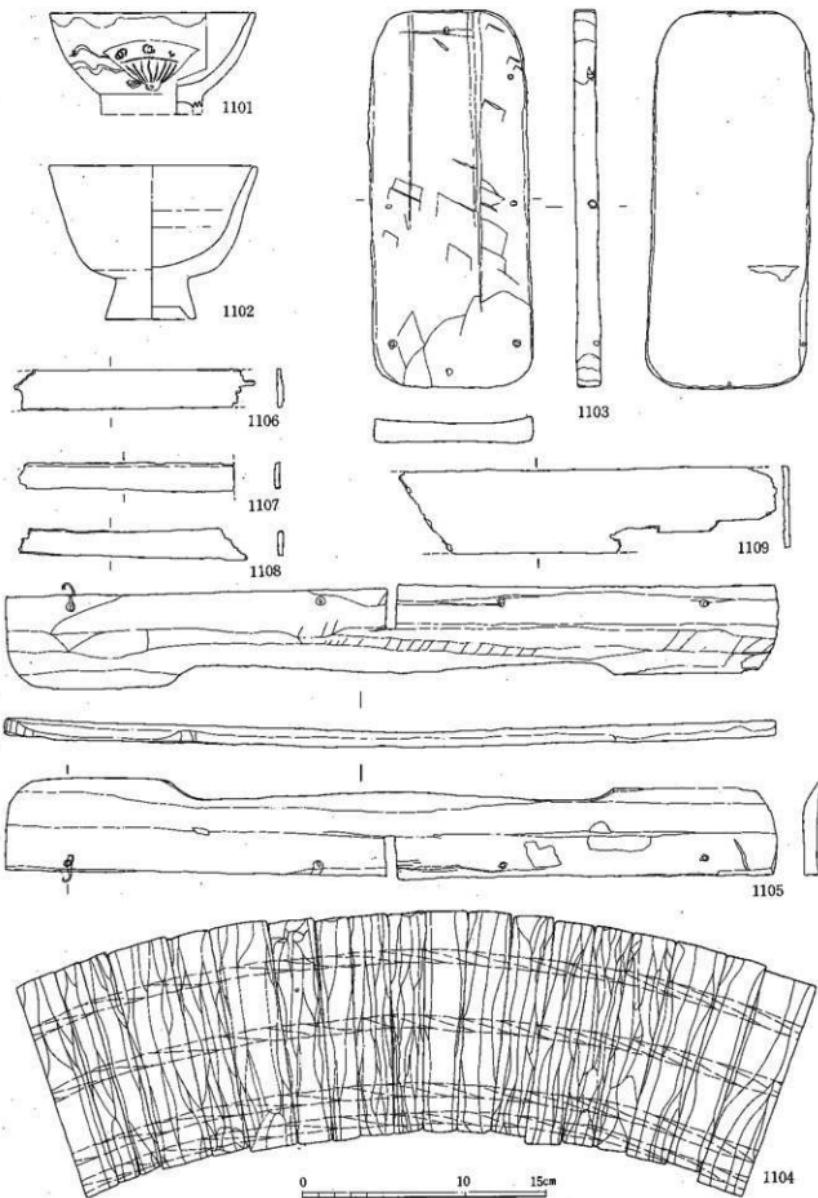
564

565

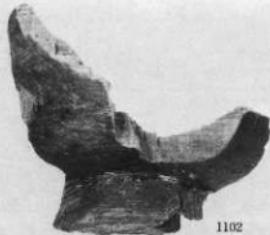
565

566

555



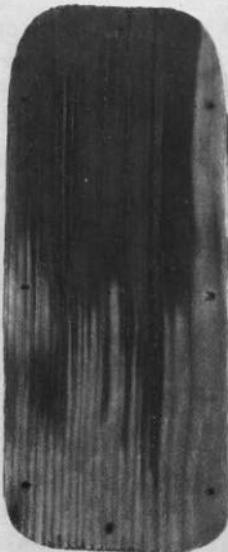
図版23 遺物実測図 1104(1/10)



1102



1101



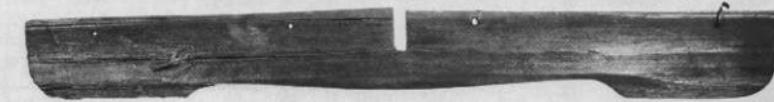
1103



1105



1104



## 参加者一覧

### 第1次調査

浅岡重弘、浅岡利光、浅岡みつい、有馬明吉、五十嵐雅志、五十嵐与志恵、池田聰、上村富美子、打林智恵子、宇津弘二、宇津修一、浦野千佳子、大河俊彦、大河みどり、岡崎正洋、奥田修、奥田百合子、奥村みつえ、小倉健秀、折橋徹、垣野その子、数井きみ江、数井静波、数井須摩子、数井敏子、数井信政、数井晴男、数井正広、数井増美、数土育子、加藤清裕、加藤つた子、加藤ナツエ、加藤美智子、金田修一、金田みゆき、川西まち子、櫛田省三、小西英雄、齊藤栄子、齊藤聰、酒井安正、坂口一之、坂林久美雄、桜井悦子、桜井義章、佐野勝、櫛川知枝、島倉道雄、清水健司、白鳥慶子、菅原豊浩、鈴木トミ子、鈴木泰浩、千田勇治、大門メス、高嶋喜秀、高瀬一幸、高瀬重義、高瀬浩幸、田上聰、瀧川ミサヲ、田口満、田中勝信、田中紀子、田中むつ子、田村啓子、土橋文江、坪田富子、寺井モトイ、中川愈、永原勇治、中村博之、西田智浩、布村秀樹、沼渡榮、野田孝作、野田ミドリ、野中孝弘、橋本和憲、林信宏、林美保子、林葉子、原弘信、菱谷新一、平井順一、広田和彦、森井英子、藤原正康、古川愛子、堀井草、増山敬明、増山実、松田信子、水馬越子、道島梅一、絞川啓吉、矢郷進、矢郷剛嗣、矢郷均、山本清治、山崎隆、山崎博史、山崎松義、山崎康子、安川幸子、安川昌司、四柳信、若林修一、渡辺幸子、渡辺竜一

### 第2次調査

浅岡克正、浅岡孝作、阿部浩一、荒井キク、上田栄治、上野栄造、上野智江、宇津弘、打林幸作、浦康博、老田たみ子、老田博義、大河みどり、大塚清子、奥村みつえ、数井進、数井須摩子、数井武人、数井信政、数井晴男、数井光宏、加藤敬、加藤つた子、金田みゆき、川添光夫、川西あき、黒田和治、小竹あや、小竹重信、小西正夫、小沼康子、齊藤春子、齊藤フユ子、酒井雅志、酒井安正、坂林栄吉、坂林和子、坂林優子、坂本忠之、櫛川チエ、島倉実、島田勝、曾根千穂、大門佐智子、大門聰子、高瀬一幸、高瀬重義、高瀬浩幸、高山芳子、瀧川ミサヲ、武部幸夫、田中勝信、田中広一、田中佐文、田中紀子、田村梅則、田村清孝、田村重則、田村己代治、塙田一成、土橋正一、土橋文江、中川愈、中島富枝、中島ハルエ、中島明西、中田英一、永原喜代子、永原勇治、永原論三、西村京子、塙田清信、野田孝作、野田みどり、塙田ゆきえ、羽根重義、増山和弘、増山キミ子、増山成美、増山路子、松田滋作、松田美子、松田信、水馬恭子、宮崎和枝、宮崎昇、村井よしえ、絞川房子、安川梅次郎、安川幸子、安川みどり、矢郷隆志、矢郷トミ子、安川泉、山岸峰子、山崎修、山崎松義、山本清治、山村郁朗、余語卓治、吉井明、吉川節子、吉川政次郎、吉田正成、吉田みさ子、若林政雄、渡辺朋子

### 遺物整理

阿部浩一、安部利子、荒井和樹、荒井一美、有馬明吉、浦野千佳子、大坪津世津子、岡本淳一郎、熊本美恵子、熊本三枝子、小竹富佐子、猪道純子、坂口実智子、篠倉都貴子、島田修一、島田千恵子、清水友博、杉崎直樹、杉崎容子、須藤順子、曾根千穂、大丸久仁、高木場万里、田上浩幸、竹内純子、田辺いずみ、塙田一成、土田節子、土田ユキ子、坪田和子、坪田信子、殿邑宏美、中川典夫、中溝治代、林靖夫、早瀬千賀子、平野裕子、藤野良子、古郡千佳子、麻柄幸子、松田千春、矢後智恵子、山口子ズ子、山口玲子、山村郁朗、吉田由香

## 富山県婦中町 友坂遺跡調査報告書

発行日 昭和59年3月31日

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 婦中町教育委員会

富山県婦中町速星754

印刷 株式会社チューエツ